大幹部、田中一郎の喜劇

アズッサ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類に『個性』という能力が発現し、人類の過半数が超人……新たなる人類として進化した未来。

そんな世界に生きる田中一郎という男。妻と娘に囲まれたどこにでもいる平凡な中学校教諭。かつては与党代議士の第二秘書を務めた男。

しかしてその実態は大組織『ショッカー』の幹部。コードネーム『大使』だった男。

そんな彼がショッカー亡き後、『新人類』があふれた世界で嫌悪する『超能力者』たちの、敵連合の大幹部として君臨するまでの喜劇。

あぁ、仮面ライダーよ、君は何処へ？　この狂った世界でただ一人、輝ける光は君だ

けだ。

目次

教師、田中一郎 ―― 1
無責任な大人 ―― 11
ショッカー大幹部、大使 ―― 22
悪の密談 ―― 30
ようこそ、連合へ ―― 43
正義の影より蠢くもの ―― 59
古き遺産 ―― 71
ショッカー、復活の時 ―― 83
微睡の夢 ―― 94

教師、田中一郎

「うんうん、君たちも受験生だ。大いに勉強し、自分たちの夢を追いかけてほしい！　私は老人で、ごらんのとおり頭髪もないが、夢を追う少年少女を思う気持ちは人一倍持っているつもりだよ。いやぁ若いというのはいい。ひたすらにがむしゃらに夢に突き進むというのはとってもいいことだ！」

その日、教諭の田中一郎はいつものように大量の唾をまき散らし、不運にも最前列目の前に座る生徒の顔を濡らしながら熱弁を続けていた。

田中一郎はどこにでもいる中年教師である。このクラスの生徒を三年間受け持ち、卒業を控えた今日まできっちりと育てあげたことに誇りを持っている。

欠点をあえて言うならば話が長いこととこうして唾をまき散らすしゃべり方だろうか。

それ以外では特に特徴のない平凡な教師である。本人曰く、生まれてこの方、病気一つしたことがないというのが自慢とのことで、本人もそれこそが自らの個性と言っている。

「だが！　私は悲しい！　老婆心……いやわしは男だがね、まぁあえて言わせてもらお

うか。揃いも揃ってヒーロー科！　あぁ嘆かわしい！」

田中は教壇をばしんっと叩く。

その瞬間、クラスの生徒たちは「またか……」という表情を浮かべた。

この田中という教師の欠点をもう一つ上げるとすれば、同じような話をもう何十、何百と繰り返すことだろう。それだけならまだしも、言ったその口で、数分後には反故にするようなことも言うのだ。普通であれば、ひょうきんな教師という風に受け止めれるものだが、こと重要な話でもそういうことをするので、その点だけはあまり生徒からの信用もない。

「うむ、確かにヒーローたちは素晴らしい！　世のため、人のため、自らの力を行使し、奉仕活動に専念するなんてことは並大抵の事ではないできない！　素直に尊敬する！

しかしだね、一教育者から言わせてもらうのだが、無限の未来を持った君たち少年少女が揃いも揃ってヒーロー、ヒーローと口をそろえるのは非常に！　嘆かわしい！」

「いや、あの、先生、でもヒーローってかっこいいじゃないですか」

「かっこいいだけでヒーローになれると思うんじゃなぁい！」

生徒の一人が思わず口にした言葉に田中は大声で反論した。目の前の生徒にまた唾がかかる。

「まぁわしは君たちの進路を今更とやかくいうつもりはない。だが、だからこそ面倒く

さい中年男のぼやきとして聞き流してくれてもいいが、君たちには無限の可能性があるというのに道を一つに絞る必要はないのだ！」

まるで自分の発言に酔いしれるかのように田中は言い切った後、深呼吸をして、自分を落ち着かせた。

「はっはっは！　センセーの言うとおりだぜ、モブども！」

すると一人の生徒が机に脚をかけて、大笑いしながら叫ぶ。

「ヒーローってのは選ばれた奴だけがなれるモンなんだよ。そう、俺のような――」

その生徒は己の手に炎……いや、爆破を発現させながら今度は机の上に立つ。まるでスターのように、指を鳴らすようなリズムで小規模な爆発を起こしながら。

「個性でなきゃヒーローなんざなれねぇんだよモブどもが！」

「爆豪君。内申点を下げられたくないなら、さっさと座りなさい。それと教室内での個性の使用は禁止だよ。今日は見逃すけどね」

田中は爆豪と呼んだ生徒に対して恐れる様子もなく、粛々と対応した。

先ほどの雄弁、熱弁はどこへやら今の田中はやる気の見れない教師のようだった。

そんな担任の態度に、件の生徒、爆豪克己は小さく舌打ちをして、田中に従った。

「ちっ……内申点は下げられたくねぇからな」

「そうとも。ヒーローを目指すならとにかく社会規範は守りなさい。それと、誰とは言

わないが、中学生で喫煙しているもの。家には連絡を入れたのでそのつもりで」

ぼそりと田中の言い放った言葉にびくりと反応を示した生徒が数人いたが、田中はそれ以上を追求することはなかった。

田中という男は確かに平凡だが、どういうわけか生徒の不良行為には目を光らせており、どんなに隠しても田中には見抜かれてしまう。それは喫煙、飲酒というだけに留まらず、学内のテストでカンニングをすると、その生徒は絶対に点数を減らされる。どれだけうまく隠してもばれているのだ。当然、文句を言う生徒はいるが、田中は態度を変えない。

しかし逆を言えば田中は真面目に学生生活を送るのならば多少のいたずらは目をつむるし、そこまでしつこく追及することもなかった。

二、三とちょっと長めの説教をするだけで許してくれる。

そのようなどこか不気味な二面性のせいで、田中は別の意味で生徒からは恐れられているのであった。

「まぁ学生というものは時にして隠れてそういう姑息な悪さをしたがるものだ。うん。わかるよ。男として、それはわかる。だがね、さっきも言ったがヒーローを目指すならそういう細かな規範、規則は徹底してもらわないと困るのだよ。これはね、大人からの忠告だ。私はなにも君たちが憎くてこう言っているわけじゃないことを理解してほし

い。君たちがヒーローになりたいというのなら、まぁ、思うことはあるが、応援する。頑張り給え。それでも、大人だからこそダメなものはダメといわせてもらうよ。それが社会というものだからね。あぁ話が長くなったけど、とりあえずこれを返そう、進路希望の奴だ。はい、順番に――」

またいつの間にか教室は田中の一人舞台となった。

もくもくと進路希望表を返却する田中。しかし、そのうちの一枚を手に取った時、田中は思わず手を止めてしまった。

「緑谷君、私は確かに無限の可能性とは言ったし、夢を応援するとは言ったが、これは本気で書いてるのかね？」

田中が手に取った用紙に書かれた名前は緑谷出久という名が記されていた。

その瞬間、生徒全員の目が件の少年へと注目される。

「雄英の、ヒーロー科……」

田中はこめかみを抑えて、絞り出すような声で、それでいて申し訳なさそうな声音でつづけた。

「まぁ確かに受験の規定には反しないし、成績という面で見れば君は学科の方は問題ないだろうけど……」

田中が言葉をつづけようとすると、それを遮るように生徒全員が噴出し、嘲笑を発し

た。

「おいおいおい！　デクぅ、てめぇ、ヒーロー科志望って本気かぁ!?」

爆豪が件の少年、デクと呼ばれた少年の机をたたきながら詰め寄る。

「無個性のテメェに何ができるんだよ！」

爆轟がデクの机を爆破しながら叫ぶ。すると彼に呼応するように生徒たちが肯定の嘲笑をさらに強めた。

対するデクは委縮しつつも、

「で、でも、田中先生の言う通り、受験はできるし……昔からの夢で……やってみないと、わからないじゃないか……」

「あぁ？　何がやってみないとだよ、無能の無個性野郎が、何ができんだ!?」

それを言われて、デクは何も言い返せない。教室はいまだに嘲笑に包まれていた。

「黙りなさぁい！」

が、それを田中が一喝して鎮める。

「なぜ笑う？　人の夢を、他人が否定してよい理由などない！」

先ほどの自分の演説の事など忘れているのか、田中は語った。

「え、先生、さっき……」

「あぁ、最近の若い者はいつもこうだ。とにかく他人をけなさないと気が済まない。自

己肯定感の低さがモラルの低下を招いているという学者の言い分も今なら理解できるとも。全く。私はね、諸君。どんな夢も持つのは自由だと思っているし、それを他人が否定するのは最も嫌いだ！」

「えぇ……先生、さっきといってること……」

「黙りなさい！　全く、人が話しているというのに、こうして遮るのも若い世代の悪いところだ。よくもそのような考えでヒーローになろうとしたものだ、恥を知りなさい！　さぁ、君たち、今すぐに彼に謝るんだ。でなかれば、内申点はゼロ！　私はやると決めたらやるぞ！　全く、長いこと教師をしてきたが、ここまで性根が腐るとは思わなかった。これだから最近の若いものは……」

　ぶつぶつと田中がぼやきを続ける。静まり返る教室。

「ん？　謝らないのかね、ふむ、そうか。では君たちの成績などは……」

　すると生徒たちは一斉に、不承不承ながらもデクに謝罪をする。投げやりな言葉が大半で、心などこもってすらいないが、とりあえず彼らは謝罪をした。

「どうしたのかね爆豪君。あとは君だけだよ？」

「あぁ？　センセーよぉ、俺は別にこいつをバカにしてるわけじゃねぇんだぜ。真っ当な事実を指摘してやってるだけだ。無個性でヒーローになれるわけねぇし、第一、そんな奴がヴィランに勝てるかっていってんだよ？」

「謝らないのかね」
「だから、さっきから」
「謝らないのかね」
「……ちっ、あーはいはい、悪かったよ」
そのような空気の中で、ＨＲは終わりを迎える。
本来であれば、みなが華々しく将来の夢を語り合うところだったが、それは田中のせいで台無しとなり、生徒の殆どはぶつぶつと文句を言いながら帰り支度をしていった。
件の田中はさっさと職員室へと戻っていった。
だが、その数分後の事である。

「いかんいかん、わしとしたことが……いやはや物忘れが多くなるというのは歳だねうん」
田中は教室へと戻ってきた。
その時、田中が見たのはうなだれるデクと友人二人を連れて教室を後にする爆豪の姿だった。
その瞬間、田中はおおよそ何が起こったのかを理解していたが、もはやそれにいちいち首を挟むような真似はしなかった。

「……緑谷君」
「あ、田中先生……」
「学校はもう終わりだよ。早く帰りなさい」
「はい……」
　とぼとぼと自分の横をすり抜ける少年に対して、田中は深いため息をついた。
「やれやれ、大体何があったのかは予想がつくよ。全く、これだから最近の若い者は……やはり親御さんに電話をして……」
「い、いいんです！　大丈夫ですから、先生！」
「そうかい？　君がそういうのならそうするが……まぁしかし、教師である私が言うのもなんだがね、緑谷君。君、雄英、やめた方がいい。百パーセント、無理だ」
「え？」
　デクは思わず田中を見上げた。
　彼の眼には田中の無表情が映り込んでいた。
「私はね、大人として、そして教師として子供の夢を奪うような真似は……あまり好ましくないが、真実は伝えるべきだと思っている。君は、無理だ。個性がない。それではヒーローには、少なくともこの社会においては君はヒーローにはなれない」
　淡々と事実をつけつける田中。

「だが、それの何が悪い？　個性がなくとも人は生きていけるじゃないか。現に君は十四年間こうして健康に過ごしている！　それに世間ではヒーローというがね、悪人を捕らえるだけがヒーローではないだろう？　そうだ、君は勉強ができるし、医者になってみたらどうかね。怪我人を治すことも人助けだし、患者からすれば間違いなくヒーローだ。医者に個性は必要ないぞ。まぁ中にはそういう便利な奴もいるかもしれないが、結局ものをいうのは技術だ。うん、それがいい。君なら難しい高校もいけるだろうし、努力をすれば医者にだってなれるさ！　医者はいいぞ、私も娘を医者にしようと頑張ってはみたのだが……ん、おい、どこにいくのかね？」

「あの、すみません、急いでますから……」

デクはさらに影を落としたように縮こまりながら、去っていく。

田中はまた溜息をついて彼を見送るとぼそりとつぶやく。

「やれやれ、今ならわかる気がするよ、『彼』が言っていた言葉がね……」

忘れ物を取りに来たということなどすっかり忘れて田中は教室を後にする。

「個性……超能力……新人類……まったくもって、薄気味が悪い」

吐き捨てるように田中は廊下を進む。

「あぁ本当に、嫌な時代だよ。そうは思わないかね、本郷君？」

無責任な大人

総人口の八割が何らかの能力『個性』を身に着けるに至った時代。人々は超人……否、新たなる人類の誕生を祝福した。

誰かはこう言ったという。人類は新たなステージに突入したと。誰しもが、何らかの超常的な能力を発露する社会は、混迷を極めるが、同時に人間というのは自制心、正義感、博愛主義というものがまだ残っていたようで、これらの『個性』を使った犯罪が行われる一方で、『個性』を使い、それらを捕らえる者たちも生まれた。

人々は彼らをヒーローと呼び、その社会的地位は瞬く間に確立された。空想上のものだったスーパーヒーローが現実のものとなり、今では国家に認められたれっきとした職業として存在する。

ヒーローたちは華麗に悪を打ちのめし、賞賛を受ける。

ゆえに誰もが憧れる。ヒーローという存在に。

「全くどいつもこいつも口を開けばヒーロー、ヒーローだ。気味が悪いと思わんかね」

田中は最近のイケオジならばこれに決まりとしつこく宣伝される乗用車の後部座席にふんぞり返りながら運転手へと悪態をついていた。

「まぁ憧れるのはわかるとも。それをいちいち否定はしないさ。しかしね、どうにもこう……今の連中はヒーローというものをはき違えていると思うのだよ。わしにはね、それがどうにも気に食わん。第一、個性主義というのが気に食わん！　君も見ていただろう、あのなんだったか、えぇい、名簿はどこにしまったか……あぁまぁいい、あの爆破爆破とうるさい子供だよ。そりゃあね、あの子もわしのかわいい生徒さ。今は教師であるわしもそこを差別するつもりはないがね、ありゃ昔の教師なら一発殴ってるところだと思わんかね？　それがいつごろか、体罰禁止だのと甘やかすようになって、しまいには個性を尊重するとかいう話で二重に甘やかし、もてはやすものだからあんな風に成長するんだと思うよ」

田中の長台詞を聞きながらも、運転手は無言だった。

彼は無表情であり、その目もどこかうつろで、果たして前を見ているのかどうかも定かではない。

次第に田中も無言を続ける運転手にイラついたのか、じたばたとまるでこどものように地団駄を踏み鳴らす。

「おい、聞いてるのかね！　お前とはどういうわけか長い付き合いになっているが、はいとかうんとかぐらいは返事をしたらどうだ、ええ？」

それでも運転手は無言なのである。

が、田中は知っている。この運転手は無言、無口というわけではなく、しゃべれないということを。

それを知ったうえでこういうことを言うのだ。

運転手は、いわゆる、人間ではない。いや元はそうであった。

「はぁ、昔が懐かしい。こんながわだけの安い車じゃなく、部下に高級車を運転させていた頃が懐かしいよ。与党代議士の第二秘書だったのだぞ、わしは！　それが何が悲しくて、中学校の教師なんぞに……あぁかつての栄光よ、いずこへ……」

田中は過去を思い出しながら、思わず涙ぐんだ。

今の自分の境遇はなんとも情けないものだった。

そう、かつて田中は代議士の秘書をしていた。政治に興味があるわけではない。ただ何かとその立場が都合がよかった。だから続けていた。

しかし、時が過ぎれば親分であった代議士が亡くなり、所属派閥が自然消滅すると次の寄生先を探すのだが、田中にはそれができなかった。

本来であれば、田中は新しい戸籍、身分を手に入れて再び居心地のよい場所にさも当然のように忍び込めるはずだった。

だが、できない。もう彼にそのような権力は残っていない。

田中は……かつては『大使』と呼ばれた男は、敬愛する『組織』が壊滅してもなお、無

様に生き残っている男だから。

「あぁこの点に関してだけは恨むよ本郷君！　わしにも生活というものがあったのに！」

田中は今はどこで何をしているかわからない男の名を叫んだ。

その男は、田中がかつて所属していた組織を壊滅させた張本人である。すさまじい男であった。忘れっぽい田中であっても彼の男の事ははっきりと記憶に刻み込んでいる。なんなら再会出来たらハグをしてやってもいいし、花束を渡してもいい。

とは思うものの、件の男のせいで田中はそこそこの権力を失ってしまったので、やはり少し憎い。

嫌いではないが、恨みはする。そんな気分だった。

田中がそのようなことをぼんやりと考えていると同時に車が急ブレーキを踏む。

そのせいで、シートベルトをしていなかった田中は放り出されて前座席に顔面をぶつけてしまった。

「あだだ！　こらっ、安全運転をしないかね君！　まさか私を殺そうとしているのではないだろうね！」

ぎろっと運転手をにらむ田中。

しかし、運転手は無言のまま前を指さす。

「うん？　はぁ、またかね。無秩序に暴れるだけのヴィランどもめ。社会秩序をもう少し考えたうえで行動してもらいたいものだね」

田中はぶつけた鼻を抑えながら、何度目かの溜息を吐いた。

彼の視線の先には多くの人だかりと渋滞が出来上がっていた。そのさらに奥では原因となる騒動が起こっていた。

巨大な粘液性の生物が暴れており、それに対応するように複数のヒーローが戦っている。だが、ヒーローたちは何か理由でもあるのか、手も足も出ないようで、戦うこともせず、被害拡大を抑えているのみだった。

人命救助、消火活動に専念するものもいるが、それ以上に野次馬の数が多く、スマホで写真を一斉に撮っている光景を見て田中は思わず吐き気を催した。

「おや……あれは……？」

その時、田中は粘液性のヴィランが何かを取り込んでいるのを確認した。

遠く離れた場所にいるはずなのに、田中には見えた。

「あれは……爆豪君かね」

ヴィランに取り込まれているのは自分の担当生徒の一人であることが分かった。

そして……

「誰か飛び出した？　緑谷君？」

ヒーローたちの静止を振り切り、緑谷出久、デクと呼ばれている少年が飛び出す。
この時代において無個性の少年が、何かをわめきながらヴィランへと向かっていく。
「こりゃあ、死ぬな、二人とも。まだ若いというのに」
だが状況は田中が思いもよらなかった方向へと変わっていく。
人込みの中から突如として巨躯を誇る男が現れ、右腕を無造作に振るうだけで二人の生徒を救出した。
「オールマイト……確か、死にかけたと聞いていたが」
田中のつぶやきを、もしも誰かが聞いていたとすれば、何をバカなことと笑うだろう。
真実を知るものたちからすればなぜそれを知っていると思われるだろう。
しかし田中は知っている。
今しがた颯爽と現れ、右腕のパンチ一つで上昇気流を発生させ、粘液性のヴィランを一瞬で吹き飛ばし、こどもたちを助けた男が、本来であればもうヒーローとして活動できるはずがないということを。
ヒーローの名はオールマイト。この世界、この時代で、最も名が知れ渡り、最も尊敬を集めるヒーローであった。
「やれやれ……あの二人も運がいい。どれ、英雄オールマイトもいるのだ、挨拶だけはしておくかな」

田中は車から降りると、まるで今しがた事態に気が付いた男のように慌てふためきながら、現場へと駆け出す。
「すまない、通してくれ。私の生徒なんだ。ちょっとどいてくれないか、私の生徒なんだよ、あの二人は」
先ほどまで静観していた男の白々しいセリフなど誰も気が付くはずもなく、田中は急いで駆け付けた風に装いながら、救出された生徒ふたりのもとへと駆け寄った。
「緑谷君！　爆豪君！　あぁ、よかった、無事なようだね。一体なんの騒ぎかと思ってみていたら、君たちが襲われているじゃないか！」
「あ、田中先生……！」
「……」
デクは見知った顔が心配をしてくれることに素直に喜んでいたが、一方の爆豪はばつの悪そうな表情を浮かべるだけだった。
「いやぁ、オールマイト！　さすがはナンバーワンヒーロー！　ありがとう、私の生徒を助けてくれてありがとう！」
田中はすぐさまオールマイトと呼ばれる大男に振り向くと何度も何度も頭を下げる。
「ノープログレム！　市民を助けるのはヒーローの使命！」
オールマイトはにかっと笑みを浮かべていたが、瞬く間に取材陣に囲まれてしまい、

田中ははじき出されてしまった。
その一瞬、田中の表情が無表情に変わったことなど誰も気が付かない。田中はまた表情を作り直し、生徒二人へと振り向く。
すると、そっちもそっちで何やらヒーローたちに囲まれていた。
「よく頑張ったな！」
「素晴らしい個性だ、君の力があればプロでもやっていけるぞ！」
「成長が楽しみだよ！」
ヒーローたちはまず爆豪へと駆け寄り、彼の奮闘を称えた。
「なぜ飛び出したんだ！」
「危険すぎるぞ、一歩間違えれば死んでいた」
「無謀と勇気をはき違えていけない」
だがもう一人の、デクに対しては厳しい言葉を投げかけていた。
この状況において、ヒーローたちの言い分は正しい。それは田中も認めるところだ。現に、爆豪にはすさまじい個性がある。話を聞けば彼はヴィランに取り込まれながらも個性を使い抗い続けていたという。
一方でデクには何の個性もない。ヴィランに対抗する能力も実力もないのに、がむしゃらに無計画に飛び出した。オールマイトがいなければ間違いなく死んでいただろ

う。

しかし、田中一郎という男は俗人である。気に食わないと思えば文句も言う。

「失礼な奴だな君たちは！」

なので、田中はヒーローたちに物怖じせず怒鳴った。

当然だがヒーローたちは田中が何を言っているのかわからなかっただろう。

「ええ、そうだろう。わしのかわいい生徒を見殺しにしかけたくせによくも偉そうなことを言ってくれるものだ！　緑谷君が勇気を振り絞って向かっていた時、君たちは何をしていたのかね！　ええ、口ではヒーローだのなんだの言いながら相性が悪いだの、それは自分の仕事ではないだのと言い訳をしおって！」

「先生、いいんですよ！　だって、ヒーローたちの言ってることは本当だし、僕はただ迷惑をかけただけで、何もできてないし、オールマイトがいなきゃ本当に危なくて……」

「君は黙っていなさい！　これはね、責任ある大人だからこそ言っているのだよ！　もしもオールマイトがいなければ、君たちはどうしてくれたというのかね。わしの生徒を見殺しにして、仕方がなかったというつもりかね！」

全くの言いがかりであることはこの場の誰もが感じていたことだった。

かくいう田中すらもそのことを理解している。しかし、ヒーローたちは言い返せない。田中の言葉は言いがかりなうえに、何様のつもりなのだと思うが、言葉の内容はま

さしくその通りであったからだ。
ヒーローという存在である以上、たとえ敵がなんであれ市民を守る。それはヒーローの原則……いや、明文化されていないだけで本来であれば持ち合わせないといけない心構えの一つだ。
きれいごとではあるが、それはヒーローにとって大切であることを彼らは知っている。ゆえにヒーローになったし、なれた。
だが、確かにあの場面において、田中の言う通り、彼らは手をこまねいていた。それは敵との相性があったのもある。人質がいたということもある。
しかし、助けられていないという事実を正当化する理由にはなっていなかった。
ゆえに、時として無責任な言葉は英雄に突き刺さる。
「そのような気持ちでヒーローを名乗るなどとはな！　全く、わしの知るあの男ならば……あぁ、まぁ、これはいいか。とにかくですな、あーつまり、わしの生徒をあまり、悪く言わんでやってほしいのです」
言いたいことだけを言うと、田中はデクと爆豪に二、三の言葉をかけてその場を後にしていく。
車に戻ると、彼は満面の笑みを浮かべていた。
「いやぁ、言いたいことをいえてすっきりしたよ。今日はステーキでも食べたい気分だ

な、えぇ？　君もどうかね？　あぁ、君は食事はとれないんだったか？　うん、肉は嫌いかね、魚か？　あぁそれとも……虫かね？」

ばんばんと後部座席から運転主席をたたく田中。

「うん？　どうなんだね、カメレオン君？」

田中にカメレオンと呼ばれた運転手は……頷きもせず、ただ車を走らせる。

その瞬間、人間の顔が崩れかけたのを田中はバックミラー越しに確認していた。

そして笑みを浮かべた。

「そうかそうか、イナゴを食おうじゃないか。わしはイナゴにはうるさいぞ、ところでイナゴを出す店なんぞあるのかね」

ショッカー大幹部、大使

田中一郎の自宅は閑静な住宅街にある。一軒家であり、庭付き、二階建てでテラスもある。そこで、彼は愛する妻と娘と共に暮らしているというわけである。

駐車場に車を止めて、田中は大きな声で「ただいま！」と言った。

いつの間にか、運転手の男は消えていた。その姿はどこにもない。

「うむ？」

だが田中はそんなことよりも愛する妻と娘の声がないことに首を傾げた。

いつもなら笑顔で自分を迎えてくれるはずの家族なのに。

「おかしいね。おーい」

田中は靴を脱いで、どたどたと自宅に上がり込む。その時点で彼は異変を察知していた。誰かがいる。それは妻と娘ではない。田中はむっとした表情を浮かべながら、ずんずんとリビングへと通ずる扉を開け放つ。

「誰かね！　私の家に勝手に……むぐ！」

その瞬間、田中は何者かに口を塞がれ、両腕を布状のもので縛り上げられてしまった。そして乱暴に蹴飛ばされると、床に顔を殴打する。

一瞬顔をゆがめて、視線をおこすと薄暗いリビングの様子がある程度把握できた。
自分のすぐそばには妻と娘が転がっていた。バラバラな残骸となって。
「なんてことを！　貴様ら、ひどいことをする！　高かったのだぞ！」
田中の妻と娘の頭は張り付けたような笑みを浮かべていたが、彼女たちの体からは血の一滴も流れない。なぜなら、彼女たちは……ロボットだから。
「よく言う……こんな気色の悪いおもちゃで家族ごっこしているような男が」
薄暗いリビングの、さらに陰の強い場所にいたせいか、田中はその声の主を一瞬見落としていた。
しかし、いざ存在を認識すると、その奇妙な風貌がいやでも視界に入る。顔面を手の形をしたマスクで覆った奇怪な男だった。彼の周囲には無数の部下らしきものたちが控えていたが、田中はそんな有象無象よりも目の前の男に注目した。
男は指の隙間から見えるひどく淀んだ目で、田中を見下ろし、彼のもとへと歩み寄る。途中、進行方向に転がっていた田中の妻の頭を蹴飛ばし、しゃがみ込みながら田中を覗き込んだ。
「ふん、どこのチンピラ……いや、今の世はヴィランか……わしを相手によくもこのような人数できたものだ。自慢ではないが、わしは弱いぞ。殴られれば死ぬ。だができれば死にたくない。何をすればいい。金なら有り金すべて持って行っても構わんぞ。君た

ちの事も黙っていようじゃないか。一応ヒーローには通報させてもらうが……」
「ちょっと黙ってろ」
男は田中のしゃべり方がイラつくのか、バリバリと首筋をかきむしる。
そして乱暴に田中の胸倉をつかみ上げた。すると、田中のスーツがぼろぼろと崩れていく。
「ふん、超能力……いや、個性か」
掴みかかられても、田中は息苦しさで顔を赤くするだけで平然と言い放つ。
「なんとも薄気味の悪い力だ。その手でわしをどうするつもりかね。え？　無抵抗の男をその手でなぶり殺しにするつもりかね。それは大層気持ちがよいだろうとも。力のない相手を強い力でいたぶるのは確かに胸がすくような……」
「黙れ」
男は明らかないらだちを見せ、田中の首を握りしめる。だが、器用に人差し指だけは田中の首に触れないようにしていた。
気道を圧迫され、田中の顔から血の気が失せていく。それでも、最低限の呼吸は確保できるようで、田中はうめき声を上げながらもなんとか意識を保つことができた。
田中は男の目を見る。手のようなマスク、その指の隙間から見える充血したような目を見て、田中は……笑った。

「チッ……」
　刹那、男は羽虫でも払うかのように、虚空に左腕をふるう。素早く、しなやかに、まるで鞭のように走る左腕が虚空の中にいた、何かを叩いた。
　その一連の行動を見て、男の仲間たちはぽかんと口を開けていたが、彼がなぜそのような行動をとったのかはすぐに分かった。
　どさりと音を立てて、男の足元に全身緑色の異様にやせ細った男が崩れる。その頭部はカメレオンそのもので、突起した両目がぐるぐると周囲を見渡しているのがわかる。だが、先ほどの一撃を受けたせいか、それとも極端に耐久力がないのか、カメレオン男は動こうともしなかった。
「ハァ……カメレオンの個性か？　体表を周囲に溶け込ませるってわけか。ふん、ボディーガードにはちょうどいいわけだ」
　男は気だるげに、カメレオン男をにらんだがもう脅威ではないと判断したのか、カメレオン男の捕縛を部下に指示すると、再び田中へと視線を向ける。
　田中は、笑っていた。
「何が……そんなにおかしい？　貴様を助けてくれるボディーガードはこのざまだぞ？」
「いや、なに、お見事お見事。彼の奇襲をこうもたやすく見抜くとは、個性だけではない

な君。実戦慣れしている。纏う雰囲気が違うよ。周りの、無能たちは全然違う。君は、どうやら本物のようだね。いや結構、わしもこの空気を感じるのは久々だ。しかし、君はまだ若いと見える。こんなことをしてちゃいかん。きちんと社会に戻って」

「そのおしゃべりな口はどうやったら閉じれる？　喉を潰せばいいか？　それとも口を縫い合わせるか？」

「君にそれができるのかな？」

「なに？」

「君は、他人を殺すとなれば殺すだろう。それも容赦なく、なんの憂いもなく、ばっさりと殺すタイプとみた。なのに、わしを今なお殺さないということはなにか理由があるというわけだ。そもそもわしの家にこうして忍び込んでいる時点でな。で、わしに何かようかね。どうせ、わしの家も調べたのだろう？　わしはしがない教師だ。君たちが求めそうなものはないし、金もそんなにない。何を求める。快楽殺人ではないのだろう？　うん？」

「ハァ……先生の頼みじゃなきゃ、今この場でテメェを粉々にしてるところだ。おい、黒霧！」

男はいら立ちを抑えるように、首をかきむしり、仲間の一人を呼び寄せる。

すると二人の周囲の真っ黒なもやがかかり、それが徐々に人の形を成していく。

鎧を着た、黒い霧。黒霧と呼ばれた怪人がそこにいた。
「あまり、ひやひやさせないでほしいですな、死柄木弔」
紳士然とした口調で黒霧がススッと男、死柄木と田中のそばまで寄ってくる。
「ほう、ワープかね。いいねぇ、ＳＦもわしは好きだよ」
「お褒めにあずかり光栄ですな。私の名は黒霧、今あなたの首を絞めているのが死柄木弔」
「これはご丁寧に。かつてのわしであれば名刺を渡しているところだが、あいにくと今はただの中学校教師でしてね。あぁ、失敬、名乗り遅れましたな。わし、いえ、私は田中一郎と申します……お、おい、なぜ首をさらに強く絞めるのかね！」
「死柄木」
黒霧に指摘され、死柄木はほんの少しだけ首を絞める力を弱めた。
「チッ……ハァ……おい、親父。お前の事はそれなりに調べさせてもらった。だが……お前の情報は全て嘘っぱちだ」
「ほう？」
田中はどこか満足気に笑う。
「生年月日、出生地、病院、故郷、ついでに学歴もすべて、嘘。巧妙に隠されている。役所連中じゃあまず見抜けない精巧さだった。挙句に、この人形を使った家族ごっこ……

調べれば調べるほど、お前という男が分からなくなる。先生もそれを見越しての事なんだろうが……お前、何者だ。ただの中学校の先生様が、こう何もかも嘘ってのは、おかしいよなぁ？」

「はっはっは！　よくぞ調べた。他人のプライベートをこそこそと。さて、わしが何者なのか？　それは先ほど言った通りだ。わしは田中一郎だよ。正真正銘、親からもらった愛すべき名前さ。かつては二郎とかいう弟もいたがね、わしより先にぽっくり行ったよ。あいつはそう簡単にくたばるとは思ってなかったがあっさりだ。まぁ人間というのはそういうものだから仕方ないのだが」

田中はあくまでも質問を煙に巻くつもりだった。

そんなことをすれば相手をイラつかせ、ケガの一つでは済まないことぐらいは田中もわかっているというのにだ。

事実、死柄木の目はぐるぐると痙攣でもしているかのようにうごめき、ワキワキと指に力が入っている。それをなだめるのは黒霧だったが、果たしてそれがいつまで続くのかはわからない。

いつ殺されてもおかしくない状況にあって、田中はまだ笑っていた。

「あははは！　いやだがこの状況ではふざけ続けるのも怖いものだな。わしはまだ死にたくないし、殺されたくない。ではそうだな、ひとつ昔話をしようじゃないか」

　ググっと自分の首を絞める指に力が入る。
「死柄木、こらえなさい。先生も言っていたでしょう。この手の男は、何をやっても止まらないと」
「ハァ……イラつく」
「いかんぞ、ストレスはいかん。それによく見れば顔色も肌の色も悪い。どうかね、朝のジョギングなどをしてみては。それか温泉だな。最近よい場所を見つけたのだが」
「話を続けろ、お前は、誰だ。なぜ先生はお前を、連れて来いといったのかが俺は知りたい。先生は無駄なことをしない、させない。そこには意味がある。貴様は、誰だ」
「……ふん、冗談の通じない若者だな。まぁ良いだろう。ならば名乗ろうではないか。わしは……かつて『大使』と呼ばれていた」
　田中は……否、大使は大きく口を開けて笑いながら名乗った。
「栄光の、ショッカー日本支部幹部。コードネームは『大使』。それがわしだよ。かつてのな」
　大使は表情を殺した顔で、言い放つ。
「手を放してもらおうか、新人類。わしは、貴様らがどうにも好きになれんのでな」

悪の密談

田中は後頭部に鈍痛を感じながらむくりと起き上がった。

気が付くとそこは埃まみれで、荒れ放題のバーのような空間。周囲には不作法にも自分の家に土足で上がり込んでいたチンピラたちがニタニタをこちらを眺めながら思い思いに酒を飲んでいるのが見える。そんな有象無象は無視して、田中は立ち上がり、スーツの埃を払いながら、まるで常連客のようにバーカウンターへと歩み寄った。

店のマスターのようにグラスを拭く黒霧が「何にいたしますか?」と聞いてくる。

「焼酎だ。ウィスキーもいいが、日本人ならば焼酎だ。日本酒はどうせおいてないのだろう?」

「ロックで?」

「当然だ。銘柄は任せるよ。おぉ、痛い。頭を殴るとはヴィランという連中は乱暴が過ぎるのではないかね」

「申し訳ございません。ですが、だからこそのヴィランであるとお考え下さい。こちらをどうぞ、あまり有名どころの酒は取り揃えていないのですが」

「ふん……」

黒霧に出された焼酎を口に含みながら、田中はちらりと右へと視線を向けた。
そこには死柄木が亡霊のように、しかし真面目な様子で新聞や雑誌を読みふけっていた。その紙面には「オールマイト出現！」、「凶悪ヴィランを一撃ＫＯ！」という見出しがでかでかと書かれていた。それを読む彼は、非常にイラついている。
「嫌いなら見なければ良いじゃないか」
「黙れ」
バッサリと切り捨てられるので、田中はもうこの話題はしないでおいた。
「で、わしをこんなところに連れてきて何をするつもりかね」
「さぁな」
器用に二本の指で新聞をめくる死柄木。
「俺はただお前を連れて来いと言われただけだ。理由は先生も教えてくれなかった」
「そうかい。言っておくが、わしは何もできんぞ」
「はぁ？」
田中は当然の事を答えただけだが、死柄木は小馬鹿にしたように、鼻で笑う。
「今、お前に向けられてる大量の殺気がわからないのか？　その中で、お前は平然と、酒を飲んでいる」
「ふん、長い人生を歩んできた。命を狙われることなんぞたくさんあったよ。だが気持

ちの良いものではないぞ？　考えてもみたまえ、四六時中、監視者がいてはろくにホステスにも通えん。尾行をまく技術だけは上達してしまった。わしとしては女性を喜ばせる社交ダンスを覚えたかったのだがね、教室にも通ったのだがまぁ結局飽きてしまってまさに三日坊主という奴だった」

「そこまでは聞いてない」

「あぁそうかい。ところでカメレオンはどこにやったのかね。まさか殺してないだろうね。彼は弱いが運転手としては重宝しているのだが」

「別室で監禁中ですよ」

　代わりに答えたのは黒霧だった。

「まぁ一応の処置です。彼の個性は意外と便利ですからね。死柄木弔を襲う直前まで、彼の存在には誰も気が付かなった。良い暗殺者になれますよ」

「あはは！　そうかね、まぁ彼はもとよりそういう用途だからその評価は嬉しいものだね。あはは！　そう、人を殺すのに派手な武器はいらない。こう、首の、ここのところだな、血管に空気でも入れてやればそれで死ぬ。隠密性と速さだよ。火力なんてのは本来不必要なのだ。それをそこらのヴィランどもはどうにもわかっていないようだがね」

　田中はまるで挑発するように、周囲のチンピラたちに言い放つ。彼らもそれを受け取り、より一層の殺気を田中に向ける。中には立ち上がり、何かしらの個性を発動させる

ものもいた。
　一触即発の状態であった。
「テメェおっさんよぉ、あんまし調子こいて」
　チンピラの一人が田中へとつかみかかろうとした瞬間。彼の目の前に全身の骨を折られた男が頭上から落とされる。
　その男は全身の至る場所からミミズのような触手を伸ばしていたが、それすらも力を失い、両腕両足はありえない方向に捻じ曲げられていた。
「ぎゃっ！」
　不幸なチンピラがまた一人。彼は両足をへし折られていた。
「おや……これは予想外ですね」
　声音からは何の焦りも見られない黒霧。死柄木に至っては反応すら示していない。
「彼を拘束していたのは触手の個性を持っていたのですけどねぇ？　人間一人なら複雑骨折させる力があったのですが」
「おやそうなのかね。だとするとその彼にはかわいそうなことをしたかな？　あはは！」
　田中のそばにカメレオン男が姿を現す。田中とは付かず離れずの位置にいたが、突起状の目は常にチンピラたちの動きを確認していた。

「まぁ不幸な事故だったということにしようじゃないか。世間様に顔向けできないことをしているからこうなる。社会勉強不足だな」

実際、田中はそのことまで把握したうえでわざと挑発の言葉を発したのである。すでに、彼は自分の安全を確信していた。それは少なくとも殺されることはないという安全である。一発、二発、それこそ腕に一本はおられるかもしれないと考えていたが、予想以上に自分は安全らしいと分かると上機嫌になり、にこにこと笑顔が増えていった。

「まるで、今まで多くの人を殺してきたかのような言い方ですね？」

会話の内容はさておき、流れは雰囲気の良いバーのようだった。

黒霧の質問に対して田中は焼酎を一口飲みながらうんうんと頷く。

「数は数えちゃおらんがねわしの一声でそうさな……千人以上は死んどるだろうな。まぁ色々と理由があったのだよ。だが、同時にわしは世界も守ってきたぞ？　正確にはわしがいた組織が、というべきだが。わしが主に担当してきたのは政治家たちに金を渡すことだったのでなぁ」

「それはそれは。大層なヴィランじゃないですか。ちょっと、尊敬しますよ」

「ふん、人殺しを尊敬するとはな。第一、貴様らのような快楽犯罪者とわしを一緒にしないでもらいたいね。わしには崇高な目的はないが、わしのいた組織にはれっきとした目的があった。人間を守るというね。ただ意味もなく殺す連中とはわけが違う」

「これは失礼を。ここには様々な者が集まります。あなたのおっしゃったように快楽で悪事を侵すもの、はたまた思想からか……色々です。ですが、ここは自由です。いかなる目的、思想があろうともね？」
「あはは！　そうかね。ならわしの目的からするとここにいる連中は皆殺しになるところだ」
「おい、あまり調子に乗るな」
　その瞬間、田中の鼻先にナイフが突きつけられる。ヒュンッと風を切る。
　死柄木が食事用のナイフを指の間に挟んでいたのだ。
「やれやれ、食器で遊ぶなと教わらなかったかね」
　しかし田中は平然としている。
「お前の話はどこまでが真実なのかがわかんねぇんだよ……一声で数千人を殺してきた？　政治家に金を融通してきた？　そんな裏社会のフィクサーみてぇな奴がどうして中学校教師なんざしている。お前の背後は徹底的に洗った。だが、出てくる情報はちぐはぐでてらめだ。第一、そんな目立つような奴を放置するほど、世間のヒーローは甘くない。俺たちヴィランだってそうだ。大なり小なり、そんな目立つ奴は名前が知られる。それがたとえ本名じゃなくともなぁ？」
「それは単純に情報隠蔽ができていないだけだよ死柄木君」

「あん？」
　ガラの悪い生徒を諌めるような口調で田中は言った。
「我が栄光のショッカーもそこの部分は非常に苦労した。暴走する改造人間、組織の離反者、邪魔をしてくる敵対組織、上位組織からのパワーハラスメントとかね。いくら金を使ったかわからないぐらいさ。あはは！」
「ところで」
　田中の長い言葉が一区切りついたのを見計らい、空になったグラスを交換し、新しい焼酎を注ぐ黒霧。
「ショッカーとは、なんですか？」
　黒霧の質問を受けて、田中はぴたりと表情をなくした。
「ショッカーとは命の守護者。人類を統率し、守護する組織」
　その田中の答えに、その場にいた全員があ然としていた。
　表情の読み取れない死柄木も、黒霧ですらも、田中が何を言っているのかわからない、いきなり何を言い出すのかといった空気を纏っていた。
「まぁ、これは組織の建前さ。中には屑の中の屑もたくさんいた。わしらの組織としてはそういう連中の方が使いやすかったというのもあるかな？　人を殺すことに快感を覚えているような奴はこっちが指示さえだせばなんの疑いもなく殺しをやってくれる

のでね。まぁ、中には、面倒な奴もいたものだが……まぁこれは例外といったところだろうな。うん」

「わかった。お前はあれだ。精神破綻者だ。サイコパスってやつだな」

死柄木はそう判断したのか、田中への興味が失せ始めていた。口から出る言葉のすべてが胡散臭く、本気なものが感じられない。

言ってることもちぐはぐで正直を言えば、何一つ信用できないのである。

死柄木とて、何も調べていないわけではない。情報屋とも呼ばれるような連中から仕入れることもあれば、探偵稼業を営むものに周辺調査を依頼したことだってある。それらがあてにならないと分かれば役所の職員と『お話』をすることで情報を仕入れることだってしてきた。

ついうっかり、役所職員の片腕を『崩壊』させかけたこともあるが、それをやっても田中一郎という男の本質に迫れないのである。

第一、カメレオン男に関してもだ。その見た目からして個性についてはある程度予測ができる。しかし、まさかたやすく人間の骨をへし折るとは思ってもみなかった。

（わけのわからねぇ、カメレオンを引き連れて、情報隠蔽能力は目を見張るものがあるにせよ、こいつはつまらねぇ思想家だ。ヒーローの次にむかつく存在だな）

なぜ先生はこの男を連れて来いといったのだろうか。

いや、違う。もっとそれよりも気になることが彼にはあった。

（なぜ、先生は……この男と直接話をしたがっているんだ）

わからない。気に入らない。死柄木にとって先生とは全てだ。文字通り、先生であり、父親のような存在であり、神に等しい存在である。先生のためなら自分はどんなことでもするだろう。その覚悟もあるし、それが当然であるとわかっている。

しかしだ。今回ばかりはわからない。こんな、意味不明なことしかしゃべらない中年の男をどうして求めたのか。

第一、ショッカーなどという組織はここ数十年の記録をあさっても存在しない。あらゆる犯罪集団を調べ上げた。なんならカルト集団にも手を伸ばした。

それでもショッカーという組織の名は片隅にも出てこないのである。

死柄木は無意識に首をかきむしっていた。

わからないことにイライラする。悟ることができないことにイライラする。何より、目の前の田中一郎という男がとてつもなく、気に入らない。

すると、バーに設置されたいささかクラシックな黒電話が鳴る。黒霧がそれを受け取り、二、三、と返事をすると彼はその身を一瞬で店内に伸ばした。時間として数秒程度だろうか。その瞬間、バーにいるのは黒霧と死柄木、そして田中とカメレオンのみだった。

「すみません。人払いをお願いされたのもので。田中様、先生がぜひお話をしたいとのことです」
「先生が!?」
　ここで初めて死柄木が大きな反応を示した。
　黒霧はそのために他の連中をどこかへと飛ばしたというわけだ。
「その、先生というのはあれかね。私の、大使のようなものかね」
「ええ、まぁ大体は。あの方は私たちの進むべき道を教えてくれる、まさしく先生です」
　黒霧は言葉を続けながら何やらを機械を操作する。するとカウンターのそばにモニターのようなものが下りてきて、映像が映し出された。暗く、鮮明な画質ではないが、その中央に巨大な椅子に座った人影が見えることがわかる。
　否、それは椅子ではない。巨大な、生命維持装置ともいえるものだった。無数の管、用途不明の機械の類、心音や脈を図る音、こぽこぽと液体の循環する音も響く。そしてその中央に座するものはさらに異質であった。呼吸器をつけた、人型。男とも女とも判別できないのは、顔面がえぐられたように潰されているせいだろうか。目も鼻もなく、口だけがかろうじて残っているような顔面。
『初めまして。ショッカー大幹部、大使殿。僕は……ＡＦＯと呼ばれているものだ。彼らからは先生とも。故有って、本名は名乗れないが……』

「いえ、結構。本名を名乗れないという理由は色々ありますとも。いやしかし、これは驚いた。先生とはあなたのことでしたか。悪の中の悪、極悪の権化、ＡＦＯ……なるほどあなたが、彼らの背後にいたのか」

田中はわざとらしく、仰々しいしぐさで挨拶を返した。

その瞬間、死柄木から殺気を向けられていることはわかっていたが、彼がこの場で自分を害するつもりがないことは予想できていた。

「なるほど、なるほど。あなたがわしを探しているということはつまり……」

『察しがよくて助かるよ大使。そう……マイスのことだよ』

「あはは！　なるほど、あれですか！　あはは！」

田中……大使は大声で笑い、バーカウンターをバシバシと力強く叩く。

「残念だが、わしにあれの情報は期待しないでもらおうか。なんせ、あれは上位組織の機密情報だからね。わしのような中間管理職にはとてもとても……」

『果たしてそうかな？　組織が潰えていく中、ただ一人生き永らえた君が、何も持たないはずがないと僕は踏んでいるのだがね？』

「買いかぶりすぎですな。本当に、わしはマイスのことは知らない。わしはあれが嫌いでね。仮に知っていたとしても……貴様ら、新人類に教えるはずが、なかろう」

『君は……僕たち、個性が嫌いなようだね』

「あぁ嫌いだ。あぁ。いや正確には違うな。好ましい奴もいたさ。だが彼らは死んでしまったよ。今この世界にいて、わしが好ましいと思う奴はなかなかいないね」
『ははは！　君たちの組織の理念を考えればそうなるのもわかる。だが、もはや組織はない。そうだろう？』
「……」
　饒舌な大使は初めて、口ごもった。
『しかし、かの巨大な組織が潰えたというのにも関わらず、ため込んだ情報、技術の流出は驚くほど少なかった。残りカスだったよ。まぁ、その残りカスのおかげで、僕はこうして生きていることができるのだが』
「貴様……その機械、どこかで見たことがあると思ったよ」
　先生が繋がれる装置を大使は知っている。
　それは、とある天才を生き永らえさせるための装置だった。
『そう、ショッカー最初期の人工維持装置さ』
「気に入らんな。我がショッカーの技術を、貴様ら新人類がわが物顔で使うということは！」
『そう怒らないでくれ、大使。僕としてもこれは必死だったんだ。少しでも、長生きはしたいからね』

先生は小さく笑いながら、続けた。

『だからもう一度聞きたい。マイスのことを、教えてほしい』

ようこそ、連合へ

大使はスーツの内ポケットをまさぐったが、目当てのものがないことに気がつき、溜息を一つ。

すると黒霧が己の黒いもやの中からたばこの箱とライターのセット取り出す。近年では健康被害をうんぬんということで各種フィルター付きの電子タバコが普及していたが、大使はあいも変わらず古いタイプのたばこを愛用していた。そこに特別な意味もないが、一つ文句を言うとすればこれらの古いたばこはクラシックスタイルということで少々値段が張る。

これればかりはもう癖になってしまっているので、今更変えようとも思わない。

「申し訳ございません。こちらに移送した際に、持ち物検査をしていましたので。良い趣味ですね。私は吸いませんが」

「ふん……そもそも吸えるのかね。全く失礼な連中だな」

言いながら大使は一本取り出し、火をつけた。

黒霧が灰皿をよこすと、大使は灰を落としながらモニターを、先生を睨みつける。

「あえて、わしも君の事を先生と呼ばせてもらうとしようか。マイスの事を、どうして君

が知っているのかはこの際問わないことにしよう。どうせ、ハイエナのようにこそこそと探り回ったのだろう」

『その通り。悪というものは時に姑息に、時にプライドを捨てて地べたをはいずりまわることも必要だからね。だが、苦労したよ。私の配下も何人も消えた。あの頃の私は、まだ弱かったからね』

「それは、嫌味かね。なんの力も持たない無個性の、いや旧人類に対する冒涜だよ」

大使の顔からは表情が消えていた。

「あぁ全く。嫌になる。わしはこの世界が嫌になるよ。右を見ても左を見ても個性、個性、個性！　個性がなければ幸せじゃないとでも言いたげだ！　わかる、今のわしにはわかるぞ。彼がどうして組織を立ち上げたのかがわかる！　博士や、あの少女たちには申し訳ないが、わしはほとほと新人類が嫌いだ！　憎いとすら思う！」

大使は唾をまき散らし大声を上げると、落ち着きを取り戻すようにたばこを一気に吸い上げ、そして氷が解けすぎた焼酎を一気に呷った。

そして癖なのか、しきりに鼻の頭をこする。こすりすぎて赤くなっていた。

「ふん。まぁいい。ここでわしが抵抗しても、わしには貴様らに抵抗するだけの力はない。そこの、カメレオンも同じだ。こいつも、長い間、改造人間として生きてきたが、旧式のポンコツだよ。人間なら殺せるが、個性次第では手も足も出ずに破壊される程度

さ」

　大使は隣で、にらみを利かせている死柄木に向かって言った。

「まぁ間違いなく、こいつは君には勝てんよ。どうせ、姿が見えなくなっても、やりようはあるのだろう、お前たちには」

『ははは！　弔は僕が手塩にかけて育てたのだ。姿が見えなくなる程度の敵には、負ける道理はない。まぁそれでも、まだまだ修行不足、勉強不足ではあるのだけど』

「先生……」

『済まない弔。悪く言っているわけじゃないんだ。君には素質がある。つまりもっともっと強くなれると言いたいんだ。誇ってもいい』

「はい」

　二人のやり取りを見て大使はわざとらしく顔をしかめた。

「麗しき師弟愛とでも言うのかね。全くもって素晴らしいことだよ」

『そう言っていただけると嬉しいよ。さて、話を戻そうか。大使、君は本当にマイスの事を知らないのかい？』

「知らん！　何なら、君の無数にある個性の力を使ってわしを自白させてみたらどうかね？」

　大使がその言葉を発した瞬間、死柄木、黒霧の纏う空気が変わる。

殺意ではなく、警戒と驚きであった。場の雰囲気がピリピリと変化していく。それを察知したカメレオンが一瞬、体をこわばらせ、動き出そうとするが、それは黒霧によって止められる。カメレオンの首が黒いもや、ワープゲートに包まれていた。カメレオンの首から上はそこには存在せず、別の空間に出現したもやの上に出現していたからだ。

首のない胴体、胴体のない首が別々の空間に存在するというわけである。

「動かないでください。そのままねじ切りますよ」

「お前、なぜ、先生の秘密を知っている」

死柄木が大使のネクタイを掴み、自らの方へと力づくで引き寄せる。

「知っているさ。ＡＦＯ、個性を奪い、与える能力を持つ男。数年前、オールマイトに殺されかけた。皮肉なものだな。貴様の、自分の弟に分け与えた個性が巡り巡って自分を殺すことになるとはな」

「お前ぇ……！」

『弔、いいんだよ。彼は僕のことを知っているだけだ。彼と、彼の組織と僕にはそれなりの因縁というものがある』

「因縁……先生、教えてください。こいつは、この男は何なんですか。ショッカーとは、マイスとは何ですか。それは、俺たちの、敵連合に必要なものなんですか。あなたに、必要なものなんですか？」

『必要だ。脳無……あれの完成度を高めるためというのもあるが、僕としては、そう、人間というものの限界を超えるマイスに興味がある』

死柄木の質問に、先生は優しく教え導くように答える。

『それに、僕は彼には、ぜひとも連合に入ってほしい』

「先生！」

「どういうことですか！」

先生の言葉は、意外だったのか死柄木も黒霧も動揺の言葉を発した。

『彼はね、ショッカーの支配人だった男だ。ゆえに大使と呼ばれた男だ。組織運営には欠かせない力を持っている。それに、彼はかつて陰謀渦巻く政治家たちの中にいて、彼らを意のままに操っていた男さ。この日本が矮小な島国なのに、なんだかんだとここまで続いてきたのは彼らのおかげという側面もある』

「先生、それがわからないんです。どこをどう調べても、この男の正体にたどり着けない」

『それはそうさ。なんせ、彼は……何世紀も前の人間だからね』

先生の言葉に大使はつまらなさそうに「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。

『正直を言えば、僕より長生きだろう、君』

「その通りだ。こうして醜く生き残っている」

「どういう、ことだ?」
先生と大使とで交わされる言葉の意味を死柄木は理解はしていた。
彼はそこまで馬鹿じゃない。優秀である。二人の会話の流れからどういうことを話しているかぐらいは推測が建てられる。
(ＡＦＯ、先生は個性が発現した黎明期から生きている。その方法は何等かの個性によるものだと先生は語っていた。光る赤ん坊が生まれてから今に至るまでゆうに数百年は経過している……だとして、この男、大使も同じだけ生きているだと?　なら、こいつも個性があるのか。寿命を克服できる、個性が)
「わしには個性はない」
すると大使が、まるで死柄木の考えを見透かしたように答える。
「まぁ世間体を考えて、わしの個性は一応「健康体」などと言わせてもらっている。病気一つしない個性だと言えばみな信じてくれたよ」
「お前……体をいじってるな」
個性ではない。しかし長い時を生きる。ならば導き出される答えは一つだ。
大使は、肉体を改造している。それがいかなる手段の改造であるかはさすがに死柄木でもわからないが、これは間違いない結論だと確信した。
だとすれば、大使をガードする、この薄気味の悪いカメレオンの肉体に似合わない怪

力にも説明がつく。
「その、カメレオン野郎も、改造されているな?」
「ご名答!」
　大使はぱちぱちと手を叩く。
「皮肉なものだ。まさかわしが……あの男、将軍と同じようなことになるとは思ってもみなかった。わしはあの男が嫌いだったが、もうそうは言えないものだ。彼と同じような体になってしまったからな。あぁ、いや、話がそれたかな」
　大使は一呼吸おいた。
「とにかく、わしは貴様ら新人類が個性などと騒ぐよりも前から貴様たちと戦ってきた。旧世代の人間だよ」
「なるほど……合点がいきましたよ。我々がどれほど探してあなたの背後にたどり着けないわけです」
　黒霧はどこか感心したように頷く。
「旧世代の人間のデータベースなど、それこそ著名人でもなければ残らない。そういうことですね。しかし、件のショッカーという組織が網にかからないのはどういうことです」
「それこそ簡単だ。ショッカーは秘密結社だが、ショッカーにも上位組織がある。それ

らの力があれば存在を闇に葬り去ることもできる。それ以外と言えば、ショッカーの技術、財産をそっくりそのまま奪おうとかいう連中もいた。そういう連中からすればショッカーという組織が残っていては困るし、逆に世間に知られては困るというわけだ」

『もっと言えば、君たちの組織は間違いなく世界を支配していた。裏から、経済を、戦争を、そして恐怖を……素晴らしい。惚れ惚れする。まさしく、僕が夢見た悪の組織！』

先生はどこか楽し気だった。

（あの先生が、ここまで楽しそうに語るなんて、久しぶりかもしれない）

死柄木はモニター越しの先生を見てそう思った。

先生とて喜怒哀楽がないわけじゃない。多くは、その感情を律して表面化することはないが、些細な声音の違いで多少の感情は読み取れる。しかし、今の先生はそんなことに気を遣わなくとも喜んでいる、楽しんでいるということがわかる。

（先生がそこまで興味を持つショッカーとはなんだ。その組織の支配人だったというこの、田中一郎……大使とは、何者だ？）

いつしか死柄木は興味を持ち始めていた。それは好意的なものではないにせよ、好奇心の一つぐらいはそそられる。

もしかすれば、それは死柄木本人が気が付いていないだけで、嫉妬という感情であっ

たかもしれない。

なんにせよ、彼は、ショッカーという存在を強く記憶した。

「世界を支配していた……か。もしそれが本当ならすげぇよ、尊敬する。悪の先輩じゃねぇか？　だがわからない。なぜ、そんなバカでかい組織が跡形もなく消えた。聞けば聞くほど、壊滅するような組織には見えないが？」

「自然消滅といえばいいかな。いや、実際は大打撃を受けたという事実もある。指導者の損失という結果もある。だが、結局は我が組織はその意味を亡くした。故に、自然消滅していった。まるで指先から壊死していくようにじわじわと、長い長い年月をかけて、組織は滅んだよ。なんせ、我が組織から旧人類は全ていなくなった。わしを、除いてな」

「……そこだ。そこがわからない。なぜ消滅する。個性があふれて、お前たちに何の不都合がある？」

『それは簡単だよ弔。その答えは大使は何度も口にしていたはずだよ？　さぁ、授業だ。考えてごらん。ショッカーの目的、大使の言葉、そして……僕たち個性を持った人類という存在を』

問われて、死柄木は考える。

そして結論はすぐに出た。

「お前たちショッカーは……俺たちのような人間を、いや個性を持った人間を過去からずっと、殺して回っていたということか」
「その通りだ」
大使はふっと鼻で笑いながら頷く。
「個性が発現した初期、黎明期の頃は差別や対立が多かった。個性を持ったものとそうでないものの間で殺し合いもあったと聞く。なるほど、理解した。お前たちはその最もたる存在。無個性の人間こそが、唯一無二の人間であると唱える狂った宗教思想……いや、もっと根源的なガイア、アニミズムってやつか」
「その通り！」
ばんばんと大使はカウンターを叩いた。
「これはね、れっきとした種の存亡をかけた戦いなのだよ！　我々旧人類という種族を生き永らえさせるため、我が組織は、ショッカーは戦いを続けてきたのだ。貴様ら新人類の脅威から、旧人類を一日でも、一秒でも生き残らせるために！　そのために我がショッカーは日本に三発目の原爆が落とされないように動いてきた！　キューバ危機も阻止してきた！　重篤な感染症が広がる前に防いできた！　まぁ、わしはその指揮を執ったことはないがね」
それらを防ぐために多くの人間を殺してきたことも大使は語った。

実際に、その指揮を執ったのは大使ではない。今は亡き仲間たちがそれぞれのできることを全力でやった結果であるとも。

「あぁみんな頑張ってきた。わしも頑張ってきた。組織のために政治家たちに金を配り、法案を可決させてきた。大佐は核の炎が世界を包まないように頑張ってきた。まさしく英雄だった！　博士も、今に思えば将軍も、みな頑張ってきた」

そこまで言って、大使はまるで子供のように涙を流した。

「だがね、もうそれも過去の話だ。この世界は新人類に埋め尽くされた。残った二割程度の旧人類で、何ができる……わしはもう諦めている。組織はその理念を失い、崩壊した。わしにはね、もう何もないのだよ」

ショッカーの理念。人類を、無個性と呼ばれるただの人間を可能な限り生き残らせること。

進化した人類、新人類から守ること。

だがその理念は、果たされることはなかった。

「それだけじゃないな。お前たち、裏社会から人類を操るっていうが滅ぼす気はなかったんだろう。人類という種族、文明を残す為に間引きをしていた。お前たちにとって不必要なものを切り捨てる一種の選民思想だ。なるほど、なるほど、合点がいった。お前が口々に人類を守ってきたといいながら殺してきたともいう言葉の矛盾が解決できた」

死柄木は初めて、大使に向かって笑った。

それも大声で。

「ははははは！　最高だ！　狂ってやがる、最高に狂ってる！　なんだお前、極悪人、ヴィラン中のヴィランじゃねぇか！　おい黒霧、こいつは愉快だ。屑、外道は何人も見てきたが、どいつこいつも結局は加虐趣味の延長線だったが、こいつは違う！　本気だ、本気でそう思っている！　化け物だよ、こいつは特殊な力もなにもいらない、ただそうあるべくしてある生粋の、ヴィランだ！」

死柄木は理解したのだ。大使を、ショッカーというものを。到底それは死柄木には許容できないものであったが、それでも彼は理解はした。

多かれ少なかれ思想というものは利権というものが絡む。どういう綺麗ごとを吐いても背後には金があり、権力がある。

この大使という男もそういう側面はあるのだろう。いやむしろ、こうして話してみてわかる。この男はまさしくその俗物的な要素の塊だ。手に入るなら、使えるならそれらの利権も権力も行使することに抵抗がない。

だが、死柄木からすれば『その程度』のことは問題ではない。そのようなものは多かれ少なかれ、善人悪人問わず持っているものだ。

だが、それ以上に。ショッカーという組織はそれを超えている。それらの欲望を内包

したうえでさらに深い、ある種の明確な目的をもってそれをひたすらに実行している。
旧人類、無個性というただの人間を守護する。その為に命を奪う。これほどまでに狂った、それでいて明確な目的はない。
ただ人類を守護する。その目的のみで行動しているというわけだ。
そしてその方法とは。
「恐怖だ。あんたらがやってきた行為は恐怖による統制！　邪悪そのものだ！」

そして、彼はもう一つの矛盾に気が付く。
「だが、お前らの目的はおかしいよなぁ？　人間が、どうして個性を発現させたのかは知らん。興味ない。だが、今もこの瞬間、個性を持った人間は生まれている。個性同士が混ざり合い、次々と新しい個性が生まれていく。無個性も残っちゃいるが、それでもこのまま人類の繁栄が続けば消える」
死柄木はその答えにたどり着いていた。
「お前らショッカーの目的は、最初から果たされることがない、全くの無意味な行動だったってことだ」
「あぁ、そうだ。それの、何が悪い？」
大使の返答に、死柄木はぞくぞくと震える。

「例え、我々人類が滅びると分かっていても、指をくわえて待っていることなどできるわけがない。我々人間も生き残りたいからな。だから、殺してきた。言っただろう、これは種の存亡をかけた戦いだったと」

合格だった。こんな狂った奴は初めて見た。くだらない人道主義でもない、コンプレックスでもない。一方では正しく、一方では明らかに間違った理由を掲げ、矛盾を理解してなお、この男、大使は行動している。

俗物でありながら、その中身はどす黒く邪悪だ。それを反省するつもりも微塵もない。なのに組織の理念を遂行しようという生真面目さもある。律義さもある。

しかしそれは使命感ではない。そうする必要があるからするというだけだ。

その目的が自分たち、個性というものを滅ぼそうという目的であっても、それはもはやどうでもいい。死柄木は、大使という男を気に入り始めていた。相変わらずむかつくオヤジであり、唾は飛ばすし、見ていてイライラとする顔だが、それでも、この邪悪の塊のような、大蛇のような男を彼は一人のヴィランとして、見ていた。

「賛成だ。お前は、俺たちの連合にいるべき人材だ。いつでも俺の寝首をかくといいさ。俺もその時はお前を殺す。だが、お前のその狂った頭は俺たちに必要なものだとはっきりと認識した。お前は無個性だが、化け物だ。頭脳というか、その精神構造というか、ありようというべきか、まるでゲームに出てくる狂った悪の幹部そのものじゃねぇか」

「それは褒められているのかね？」
「あぁ、珍しく、俺が他人をほめている。あんたは、ヴィランだ。誇ってもいい。ヴィランだ」
　死柄木は両手を広げた。
「第一、あんた、その御大層な理念を守るつもりなんてからっきしないだろう？」
　死柄木は大使の奥底にあるどす黒いものを見抜いていた。
　大使は答えない。つまりは、そういうことだった。
「あんたにしてみれば、そんなことはどうだっていいわけだ。あんたは、ただただ悪党だ」
「ふん、なんとでも言うがいいさ。それに、悪いが、わしには興味のないことだ。しょせん、わしは小悪党だからね。わしのような男は、あとからいくらでも湧いて出てくる。それに、今更こんな男が必要かね、君たちに。そもそもわしにメリットがない」
『一つ』
　先生がモニターの向こう側で立ち上がり、画面へと近づいてくる。
『一つだけ、僕が君に与えられるものがある』
　その瞬間、モニター画面から先生の姿が消える。
「それは個性じゃない。君に個性はいらない。与えれば君は自殺するだろうからね」

瞬きする間もなく、大使のすぐ隣には先生がいた。
「ほう、わしに何をくれるのかね」
――仮面ライダー――
その、先生の言葉は死柄木にも黒霧にも聞こえなかった。
大使の脳内に直接届く声。それが何等かの個性によるものであることは大使にも理解した。
その言葉を伝えると同時に先生の姿はまた消える。
入れ替わるように死柄木が再び大使へ、
「ようこそ、敵連合へ。大使、俺はあんたを歓迎する」
死柄木からの一方的な言葉に大使は何も返答はしない。
なぜなら、大使は……笑っていたからだ。
『いい笑顔だ。大使』
先生もまた大使を歓迎した。

正義の影より蠢くもの

田中一郎が、大使が敵連合と手を結んだのと同時期。

一人の少年が伝説のヒーローと出会った。

少年の名は緑谷出久、通称デク。ヒーローの名はオールマイト。

オールマイト。正体不明、年齢不明、個性不明、しかしてナンバーワンのヒーローとして君臨する平和の象徴。そんな彼とデクの関係は一言でいえば師弟関係である。

だがこれは秘密。オールマイトの個性『ワン・フォー・オール』を受け継ぐために、デクは日夜体を鍛えていた。その方法の一つとして、彼はごみで埋め尽くされた海岸線を自力で撤去しているのである。

それは過酷の一言であり、中学三年生の少年の体力を鑑みればその訓練プラスして日々の日常、そして受験勉強すらもこなさないといけないのは並大抵のことではない。

「ヘイヘイヘーイ！　昨日よりペースが落ちてるぜぇ！　ペースを乱せば余計に疲れるだけだ、呼吸を整えて、無駄な力を使わずに効率よくゴミ掃除だ！」

顔を青くして、息も絶え絶えなデクを鼓舞する男。オールマイト。

だがその姿はオールマイトを知るすべての人々が見れば衝撃かもしれない。筋骨

隆々、鍛え上げられた肉体、鋼の男、そう称するべき無敵のヒーローは今、枯れ木のようにやせ細っていたからだ。

それがオールマイトの正体。今の姿。だがこれを知るのは一部のもののみ、知られてはいけない秘密であった。

彼が無敵のヒーローとしての肉体を保てるのはせいぜい三時間。それもいつまで続くのかはわからない、日に日に寿命を削っている状態であった。

過去、因縁の敵との闘いの際に負った負傷。致命傷ともいえるその傷を負って、死の淵をさまよったが、それでも彼はこうして生きていた。

なぜなら自分は平和の象徴、膝をつくわけにはいかないのだから。

しかし、それも永遠ではない。ゆえにオールマイトは自分の後継者を育てるべくこうして動いていた。その後継者こそが緑谷出久、デク少年であった。

なので、今日も今日とてその作業を続けていたのであるが……。

「うわぁぁぁぁ!」

海岸線のごみ山の中、デクの悲鳴が上がった。

「おおおおオールマイトぉぉぉぉ! 大変、大変なんです、死体がバラバラで、バラバラの死体が捨てられてて転がってて!」

疲労困憊のはずなのにデクは大声をあげ、涙と鼻水をまき散らしながらオールマイト

のもとへと逃げてくる。
「オイオイ？　死体？　それはちょっときついジョークだぜ少年」
「嘘じゃないんです！　本当にあるんです、あっちに女の人の死体が、生首……う、おぇ……」
「チョイチョイチョイ！　その反応、嘘じゃないな！」
その瞬間、枯れ木のような男は一瞬にして肉体を膨張させ、無敵の男へと変身する。
オールマイトとて歴戦のヒーロー。デクの必至の形相を見ればそれが嘘ではないということぐらい判断できる。
それにこのごみ山と化した海岸線。確かに死体を放棄することもあるかもしれない。事実、彼らはここで動物の死骸なども見てきた。
一応、青少年の教育も踏まえて、オールマイトは事前にそういうえぐいものは自分で処理しておいたがそれもさすがにすべてではない。
ヒーローという仕事をする以上、そういったものとは絶対に向き合うことになる。ゆえに、あえて残してるものもあった。
だが、同じ人間の死体ともなると話は大きく変わる。心構えができていないうちにそのようなものを見ると、最悪トラウマになることもあるからだ。ヒーローデビューを果たしても、傷ついた人々、息絶えた人々を見てしまったがゆえに引退をするヒーローも

少なくはない。
「ムッ!?」
そう考えつつ、オールマイトはデクが作業をしていた区画までやってくると、件のものを発見した。
「これは……」
そこにあったのは確かに女性二人のバラバラ死体だ。
しかし、それは人間ではない。機械、ロボットだ。その証拠に血は流れず、金属部品が見えていた。
だがあまりにもリアルなその見た目はパッと見では確かに死体にしか見えないだろう。かくいうオールマイトも一瞬だけ、そう見えてしまった。
「緑谷少年！　大丈夫だ、これは死体なんかじゃない。マネキン……のようなものだ」
「えぇぇぇぇぇ！　マネキンって、でも、やたらとリアルというか、そんなそれロボットじゃないですかぁ！」
「うむ、非常によくできている。君が勘違いするのも無理はないな。ふーむ、これは恐らくヒーロー教習所当たりで使われるリアルテイストの要救助対象ロボットかもしれん」
「な、なんですかそれ？」
「あぁ、レスキュー系のヒーローを対象にした講習とかがあってね。そのさいにこうし

て、本物そっくりのマネキンやロボットを用意して臨場感を出すことがあるんだ。さすがに趣味が悪いということで一部からは反対の声も出ているのだが、かといって当然だが本物を使うわけにいかない」

「は、はぁ……ということはこれ……」

オールマイトの本物ではないという言葉にデクは多少、安堵を示した。

それでもあまりにもリアルな見た目からは目をそらしていた。

「だろうね。しかし、嘆かわしいな、そして趣味が悪い。悪質な悪戯にもほどがある。緑谷少年、これは私が処理しよう。さすがに、これは一人のヒーローとして、大人として文句を言ってやらないといけない。どこの教習所が捨てたのかはわからないが、ヒーローの施設としてこのような行為はナンセンス！」

そのように少年に説明するオールマイトであったが、その実、内心では別の事を考えていた。

（ヘイヘイ……なんだこれは……こんな高性能な、人間そっくりすぎるロボットが不法投棄なんてありえないぜ。それに、これは……母と娘？）

残骸を見ながら、オールマイトは薄気味の悪さを感じた。

（少年にはあぁして説明したが……いくら何でも不自然だ。それに、こいつはつい最近捨てられている。本当に教習所のものが不法投棄したのなら、それはそれで問題だが説

明はつく。だが……もしそうでないなら）

近年の技術力の向上は確かに目覚ましい。個性の中には身体能力だけではなく知能的なものを向上させるものもある。

彼らの尽力によって人々の生活には大きなゆとりができたのもある。

それを踏まえてなお、オールマイトは首を傾げた。こんなロボット、果たしていまの技術で作れるのだろうかと。

いや、そもそも、作ったとして、なぜ捨てるのか。壊れたから捨てる。それはその通りかもしれないが、これは粗大ごみにするにしてはいささかハイテクすぎる。古い機種のスマートフォンが手元に残ったけど邪魔だから捨てるというような気軽さでできるものではない。

（確かに教習所などに設置される要救助者型ロボットは人に似ている。だが、『近年』ではあまりにも人に近い姿は悪影響ということでよく見れば違うと分かるようにしてあった。だが問題はそこではない。これは、どこからどうみても人間だ。肌の感触もソフトでなめらか……特有の硬質感がない。確かにロボットを使うところは多いが、ここまでのものは……）

オールマイトはデクに続きをするように指示を与えつつ、残骸をまとめる。

見れば見るほど、人間そっくりなロボットだった。中年の女性と、中学生ぐらいの少

女の形をしている。

いやそれだけではない。デクは気が付かなかったのかもしれないが、よく見ればこのロボットの残骸の周囲に捨てられているのは女性ものの服やバッグ、指輪なども無造作に捨てられている。勉強机、ぬいぐるみ、そして……粉々に粉砕されたスマートフォン。

（ＳＨＩＴ……これは本当に趣味が悪い）

オールマイトはなるべくデクにはそれらを見せないようにする。

これはまるで、一件の家から家族がまるごと捨てられているような気分だ。

（こいつは、尋常じゃないぜ。技術の拡散防止という側面もあるが、ヒーロー側の技術は極力民間には下りないように厳重な取り締まりがある。古くなったものは回収業者がくるし、それらも政府の直轄。処理にせよなんにせよ二重、三重のチェックは必ず行われる）

全く、絶対に、不法投棄が行われないかと言われればイエスとは言えない。だが、不自然であった。なぜこの二体だけが捨てられていたのかである。

わざわざこの二体のロボットだけを捨てるのに不法投棄などという手段に出るかという疑問が彼の中にはあった。

第一、このような場所に捨てる方がリスキーである。それに、こういったものにはどこの所有物かを示すＩＤナンバーなどがどこかに記載されているはずだった。

それらをたどれば製造場所が判明し、そこから遠回りにはなるだろうが所有者へとたどり着くこともある。

（やはり、ないか……ＩＤナンバー）

つまり、未登録である。

（だとすればこれは……まさか……）

オールマイトの脳裏に一つの懸念が浮かび上がった。

未登録のロボット。そのようなものは即裏社会というものに繋がる。登録がなされていない時点で不正であることは間違いないのだが、問題はその不正を行っている者である。大企業であれば、なおさらたちが悪いがその手の連中は用心深く、できるだけ足をつかないようにする。

ではヴィランはどうか。ありえないと断定はできない。ヴィランとて馬鹿ばかりではない狡猾で頭脳明晰なヴィランは数えるほどいる。だが、このような高性能なロボットを運用できるようなヴィラン、ヴィラン組織はどこか。

（奴、ＡＦＯか？）

その一瞬だけ、オールマイトは顔を強張らせた。それは一秒にも満たない。他人が見ても、彼の表情の変化に気が付くものなどいないだろう。

「お、オールマイト？　どうしたんですか、顔色が……まさか傷が痛むんですか！」

「ん？　いや、違うとも緑谷少年！　さぁさぁ、私の心配よりも自分の心配だぜ！　今日の分のノルマが達成できないようじゃ雄英合格は夢のまた夢だぜ！」

デクにそういいながらオールマイトは内心焦っていた。

（いかん、いかん。まさか彼に悟られるとはね。私も、気負いすぎてるようだ。だが……）

オールマイトはデクの姿を眺めながら、それでもこびりついた疑念を払しょくできないでいた。

（こんなものを持っていられるのは、あの男とその関係者ぐらいだ……オール・フォー・ワン……いや、だが奴はあの時間違いなく、倒した。ならば……）

なんにせよ、この事は報告せねばなるまいとオールマイトは考える。

考えすぎであっても、平和のためならそれぐらいがちょうどいい。

（それとも、奴らか……？）

胸騒ぎは、決して嘘ではないのだから。

それから程なくして、四国地方のとある山間で山崩れが起こった。

幸い、人の集まる場所でもなく、山奥であったために人的な被害はなかったものの、山崩れの勢いは大きかったらしく、小さな名もなき山が一つ消えていた。そこはかつて鉄

道網計画がなされていた区画であり、工事半ばで中止されたためにさび付いたレールなどが残っているだけ、あとは途中で行き止まりになった洞窟が数個あるだけの場所だった。もはや責任者が誰であったのかは不明なほどに古いもので、現政府とてこの事実を知ったところで正確に状況を把握できるものはいない。

工事を担当していた企業もとうの昔に倒産しており、利権書類もバラバラでどこの誰が所有しているかもわからないままだった。

だが、しかし。その未完成の鉄道の真下に、秘密基地と呼ばれるものがあったことを知るものはいない。

そこは基地とは銘打っても、実態は倉庫のようなもので、設備機能の大半が未整備のまま役目を終えていた。だが、知識のあるものが見ればその設備の完成度に目をむくことだろう。

そして基地内部に並べられた無数の人型。むき出しの金属装甲と骨格を思わせる鉄の顔。それはロボットだった。そこはロボット、アンドロイドの製作工場も兼ねていた。人間そっくりのアンドロイドの工場。

そこが、爆破されたのだ。機密保持のための高性能爆薬はいまだ機能を失っていなかった。それが起動、爆発を起こし、基地を地中深くに埋め込んでいった。

そんな事実を知る由もない世間はただの山崩れとして小さなニュースに報道程度で

終わった。

「まぁつまるところ、ショッカーの遺産というのはいたるところにあるというわけですな。もちろん、わしはその全ての場所を把握している。どこが、どう生き残っているかまでは知らんが、君たちの玩具を用意してやるぐらいはできるというわけだ」

田中一郎。

否、大使は携帯電話越しに大きな笑い声をぶつけていた。

すっかりと広くなった自宅。いやもはや家と呼ぶべきかも疑わしい。テレビ、ソファー、テーブルなどの必要最低限の家財しかなく、それ以外の不必要なものが一切なくなった空間。

かつてはかりそめの妻と娘の小道具もあったが、それすらもすべて捨てた大使は悠々と殺風景なリビングで楽しそうにテレビを眺め、電話をしていた。

「そう、だから派手に壊してくれ。欲しいものがあれば勝手に持って行っても構わんが、とにかく基地施設は全て爆破だ。なに、君たち敵連合に足がつくことはない。ヒーローたちも首をかしげるさ。これは何だろうとね」

大使は楽しそうに語る。

「こちらの技術を苦渋の決断で手渡すのだ。君たちの、脳無という改造人間も、それで多少は安定するだろうさ。うん？　なぜ基地を破壊するのかだって？　そりゃ死柄木君、

簡単だよ。古くなった施設は危ないだろう？　誰かが迷い込んだりしたら大変だ。それに……色々と厄介なものもあってね。不発弾のようなものさ。臭いものには蓋。それが一番なのだよ。政治の世界もそういうものさ。うん？　そんな話は聞いていない？　あぁ、そうだったね」

大使は缶ビールをあけて半分ほど飲み干して、続けた。

「とにかく、これは必要なことさ」

そういって、大使は電話を切る。

「さて、私からのメッセージ、受け取ってくれるかな？」

古き遺産

すべての事柄は偶然に帰結する。
それゆえに、この戦いもまた偶然でしかない。
無数の夥しい肉色の触手と固くしなやかな樹木の枝が空中でぶつかり合う。
数で勝る肉色の触手は、しかして樹木の枝の強靭さの前にちぎれ、弾かれ、ねじ切られていく。
「そこまでだ、ヴィラン」
男の名はシンリンカムイ。個性は樹木。その名の通り、己の肉体を樹木とし、自在に操る能力を有したヒーローである。
彼が、その現場に居合わせたのはまさしく偶然であった。パトロールをしていたわけでもない。他の何か仕事があったというわけではない。ただたまたま通りかかったというだけの話だった。
突如として現れたヴィランの暴虐。それが、いつ、どのようにして現れたのかはわからない。無数の触手を操り、ところかまわず破壊活動を始め、あまつさえ人々をその触手で捕らえる暴挙。

大方、変異系、異形系の個性の暴走か何かであるとは予測をたてられた。
それを、ヒーローたるシンリンカムイが見逃すはずがなかった。
ゆえに彼は颯爽とその現場へ駆け出し、ヴィランと対面したというわけである。
「貴様に警告する。ただちに人質を解放しろ」
もはや何度投げかけた言葉なのかはわからない。
シンリンカムイは毅然と言い放つが、ヴィランからの返事はない。
（こいつ……そもそも、意識はあるのか？　いや、知性が、感じられない。それに、なんだ、この個性は）
自らを狙う触手、砕けたコンクリート片を投げつける触手、そして無作為に人々を捕らえる触手。ゆうに五十は超える触手を操るヴィラン。
その姿はあまりにも醜悪であった。
シンリンカムイは、いかなる似姿であろうとあいてを侮辱することはない。だとしても、そんな彼でも、目の前のヴィランは醜悪、下劣という言葉しか浮かばない。
上半身は肉色の触手だけで構成されたかのような、正気を失いそうなほどのおぞましい。それはまるでイソギンチャクのようにも見えた。本来、人間であれば頭部があるべき場所には頭も顔もなく、回転のこぎりのような牙とぽっかりと空いた大きな口だけが広がっていた。そんな上半身を支える下半身はどういうわけか虎のような意匠を持っ

ていた。いや、俊敏性も高い、チーター、もしくはジャガーとも言うべきか。
アンバランスな見た目ながらも、その俊敏性はシンリンカムイと同等であった。
（あえて、いうなれば……イソギンジャガー！）
「助けて、シンリンカムイ……！」
「はっ！」
その時、シンリンカムイは子供の震える声を耳にした。無数の触手、捕らわれた人々は多い。その中の一人、子供の声。
ならば彼はやらねばならない。助けなければならない。
「待っていろ、すぐに助ける！」

シンリンカムイは再び体の樹木を伸ばし、ヴィランへ、イソギンジャガーへと攻撃を再開する。
「受けろ、先制束縛！」
敵が何であれ人々を守る。
それがヒーローの務めであるから。
シンリンカムイは己の必殺の一撃を放つ――
「ジャジャジャジャ！」

「なにっ!?」

イソギンジャガーも同じく触手を伸ばす。だが、強度という点ではシンリンカムイの樹木枝の方が強力であった。

だが、シンリンカムイの油断であったのか、それともこれを予測しろというのが無理な話なのか。

「毒……溶解液?!」

シンリンカムイの枝によって切断されるイソギンジャガーの触手。だが、その切断面や先端から分泌される液体がシンリンカムイに触れたとたん、じゅうじゅうと音を立て、腐った匂いを漂わせた。同時に、シンリンカムイの肉体、樹木が腐るようにぼろぼろと崩れていく。

この瞬間、シンリンカムイは相手との相性が最悪であることを理解した。炎などを操る敵ではないにしても、問答無用の溶解液は肉弾戦を得意とするヒーローにとっては天敵でしかない。

「なん、だと!?」

その隙をつかれ、一瞬にして間合いを詰めたイソギンジャガーの蹴りがシンリンカムイの胴体へと直撃する。

（馬鹿な……なんだ、こいつは、複数の個性を、持っているのか!?）

ダメージを受け、意識が朦朧としかけるも、シンリンカムイはまだ膝をついていない。
「触手、毒液、高速移動……加えてこのパワー。なんという敵だ……!?」
敵は強い。それははっきりとわかる。しかし、シンリンカムイは立ち上がる。
なぜならば負けるわけにはいかないからだ。
だって、自分は、ヒーローなのだから。

シンリンカムイが戦いを始めるその少し前までさかのぼる。
大使はたまの日曜日だというのに黒霧からの連絡を受け、仕方なく準備をしていた。
「それで、血を抜かれていたと?」
『ええ、それで若いものを脅して、こちらまで来たようです。その際に、あなたのお知り合いだと言うので』
スーツに着替え終えると、まるで示し合わせたかのように黒霧のワープゲートが開く。
「ふむ……見ない顔だな?」
バーに到着した大使は、死柄木の殺気を受けても平然としている一人の女性に気が付

く。モスグリーンのワンピース姿に銀色のポシェット。なんとも奇妙でアンバランスな組み合わせなのに、不思議とその女には似合っていた。このご時世、頭髪の色も様々で、赤やピンクもあるというのに彼女は驚くほど黒く、長く、まるで一つの巨大な宝石のようにも見える。

そのくせ見た目はまだ若い、二十代半ばでどこにでもいる若い女性といった姿だが、大使はその顔に見覚えがない。

だが、彼女のすぐそばで体を縮こませながら潜む影を見て、すぐに理解した。

巨大な蝙蝠の羽をもった、ひどくやせ細った男……蝙蝠男である。

「お久しぶりです、大使」

「君か……楠木美代子君」

大使はほんの少しだけ目を見開いて驚いたが、すぐさまにこにこと笑みを浮かべて、美代子と今にも彼女を殺しそうな殺気を向ける死柄木の間にどすりと座った。

「顔も、声も変えたな?」

「ええ、さすがにいつまでも同じ姿というのは生きづらい世の中ですから。それに比べて、あなたは全く姿が変わらない。変える気もない。ちょっと尊敬しますわ」

「あはは!　自分で言うのもなんだが、わしの顔はどこにでもいる中年オヤジだからね。誰も気にはしないさ。それに、職場さえ変えればみんな気にしなくなる」

「まぁ、かわいそうに。かつての田中一郎は存在感の塊でしたわ。政治家の誰も彼もがあなたを意識していた。好意的、あるいは見下しながらも日本の政治家はあなたを中心に回っていたのに……」
「それは過去の話だよ、美代子君。そういう君は今、何をしているのかね」
「ＯＬ……のようなものです。どこにでもいる」
　美代子の言葉に大使は目を丸くした。
「ＯＬ？　君が？　なんの冗談だね」
「冗談ではありませんわ。無職というのは、意外と目立ちますので、こうして日々細々と働いているのです」
「緑川のところはどうしたかね。あそこはまだ大企業じゃないか。あぁ、そっちの系列か？」
「まぁ、そういうところですね。他人の力を借りるのは少々気が引けましたが、そうも言ってられませんでしたから」
「おい……」
　昔話に花を咲かせる二人の間に割って入るように、死柄木がテーブルを叩き、美代子を睨む。
「あんたもショッカーとやらの関係者か」

「そうですね。正確には元ショッカー、そして裏切者といったところでしょうか」
美代子は気にしたそぶりもなく、にこりと返答した。
「彼女は最古参のメンバーだったのだが、見事に裏切ってくれてね。彼女に潰されたショッカーの作戦、基地は数知れないよ。全く、ひどいことをする」
付け加えるように説明する大使。
それはまるで自分の娘を紹介するかのような気楽さがあった。
「ごめんなさい、大使。でも、とても楽しかったの。ルリ子さんの下で、あなたたちと戦う日々は私の青春でした」
「よくもいう……わしが若ければ首を絞めてるよ」
「まぁ怖い。でも大使、私を呼んだのは、あなたでしょう？　わざと基地を破壊させて、ショッカーを知るものの反応を見る……とはいえ、本命は私ではなかったようですけど」
美代子の指摘に大使はぶすっとした表情を浮かべて、黒霧に酒を注文する。
差し出されたグラスの中身を一気に呷り、大使はうんうんと頷いた。
「そう、目当ては君じゃない。だが、君が来てくれるとは思ってなかった。それに、うちの若いものを干からびさせるのは感心しないね？」
「正当防衛ですわ。私、敵連合さんのところに案内してほしかっただけですのに、あの人

たちったら、襲ってくるものだから」
　美代子のそばで蝙蝠男はがちがちと牙を鳴らしていた。
「二人ほど血を抜かれましたよ。顔面蒼白です」
　黒霧は淡々と述べているが、その実、体のもやをいつでも展開できるように警戒していた。
「ですけど、少し貧血する程度ですよ？　殺してはいません。何かと、厄介ですからね？」
　美代子の言い様に、大使はちらりと黒霧を見る。
　黒霧は無言のまま頷いたように見えた。美代子の言っていることは嘘ではないらしい。
「御託は良い。用件を言え。何が目的で俺たちに接触してきた？」
　死柄木はぴくぴくと右の指を強張らせている。いわゆるブチ切れる寸前という奴である。
「改造人間が一体、暴走して行方をくらませました」
「ほう？」
「あなたの、目論見通りですよね、大使」
「うん？　何のことかな？」

とぼけて見せる大使であったが、そうは問屋が卸さない。
真っ先に反応を示したのは死柄木だった。
「おい、どういうことだ。改造人間？　暴走？　そんな報告は受けてないぞ大使」
「わしだって、破壊に向かわせた連中から報告は受けておらんよ。ただまぁ、基地破壊の際に重要物資を施設外に脱出させる装置が設置された基地がいくつかあったとは記憶しているがね？」
「チッ……んで、その暴走したって奴はどんなのだ？」
「ここ、テレビか、ラジオはございますか？」
死柄木の質問に対する返答のつもりなのか、美代子は逆に返してくる。
「ございますよ。少々、電波は悪いですが」
黒霧がどこかからリモコンを取り出し、バーの隅に設置された小型のテレビを点ける。
するとそこにはニュース中継が放送されていた。
『現在、謎のヴィランが街で暴れています！　なんと恐ろしいヴィランでしょうか……無数の触手でところかまわずものを掴んでは投げつけて、大量の人質を取っています！　イソギンチャクのような上半身なのに下半身はまるでジャガーのような、二体の動物が融合したような姿！　邪悪の化身のようです！　うわっ毒液だ！　あいつ毒液まで

吐き出すぞ！　なんの個性だ！』

絶叫のただなか、黒煙の上がる街並み、それを実況するレポーター。

カメラ映像が激しくぶれる中、しかし彼らもまたプロなのか、はっきりと街中で暴れるヴィラン……否、改造人間を映し出していた。

イソギンジャガーであった。

『シンリンカムイ、シンリンカムイが単身戦っています！　がんばれーシンリンカムイ！　そいつをやっつけろー！』

イソギンジャガーと戦闘を繰り広げるシンリンカムイもテレビの画面に映り込む。

シンリンカムイは己の四肢を複数に枝割れさせ、イソギンジャガーの触手と対抗する。無数の触手同士のぶつかり合う。片や無差別の破壊活動、片や捕らわれの人々を守る為。

壮絶な戦いが繰り広げられているのはテレビを通しても伝わってきた。

しかし、映像を見る限りでは、ややシンリンカムイが押され気味であった。人質がいる手前、大きな行動をとれないのが原因なのは明らかである。

「今現在、このように暴れています。今はヒーローが対応していますので、大丈夫だとは思いますけど。大使、これはあなたの計画ですよね？　こうすることで、あの人に、本郷猛さんに、メッセージを送る……そういう、ことですよね？」

「それで釣れたのが、君という点はいささか不満ではあるがね」
　大使はぱちんと額を叩いた。
「あぁ、死柄木君。怒らないでくれよ」
　同時に大使は怒りの矛先を自分の向けつつある死柄木をけん制した。
「仮に、あれが倒されてもこの連合の足はつかんよ。あれは、ショッカーの残した遺産。連中が調べたところで、君たちとのつながりなど、出てきやしないからね。もちろん、これは先生にも許可を取っているとも」
「チッ……」
　先生という言葉を出されれば、死柄木とて何も言えなくなる。
「まぁなんだ。これはわしなりの、君たちへのアピールだよ。一応、わしらは仲間だ。こちらも、手の内を見せておいて損はないだろう?」

ショッカー、復活の時

激痛が、意識を飛ばすことを許さなかったのはシンリンカムイにとって幸いだった。

今の彼は無数の毒液を浴び、体の至るところが腐食を始めていた。常人であればそれは致命傷どころか一瞬にして肉も骨も溶け落ち原型をとどめていない。だが、彼は樹木という個性を最大限に発揮していた。樹木を操るとは肉体を枝のように伸ばすだけではない。シンリンカムイは己の肉体を『漆』でコーティングしていた。それで毒液の浸食を防いでいた。

とはいえ、これには相当の体力を消費する。言わば、体液を漆に変換しているのだ。制限も大きい。

なおかつ、迅速に人質を解放しなければならない。幸い、ヴィラン、イソギンジャガーは毒液を人質には向けていない。それは偶然なのか、意図してのものなのかはわからないがとにかく都合がいい。

（全力のウルシ鎖牢で、まずは奴の触手をすべて封じる……さすれば、奴は人質を手放さざるを得ない！）

シンリンカムイは走る。彼が戦い始めて、八分が経過しようとしていた。

他のヒーローたちの到着にはまだ時間がかかる。むしろ、この場に自分が居合わせたのは偶然であったが、良かった。

そのおかげで被害の拡大を防げたからだ。

しかし、なんにせよ、目の前のヴィランは早急に倒さなければならない。

シンリンカムイは次の一撃を最後にすると決めていた。人質を助け、ヴィランに一撃を与えて止める。そのプランはすでに構築済みだ。

完璧を求めるならば、他のヒーローが駆けつけてからの方がよいだろうが、果たしてそんな余裕があるかどうか。

待っている間に、人質にもしものことがあれば、そちらの方が問題なのだから。

「先制束縛！　ウルシ鎖牢……！」

今現在、シンリンカムイができる最大数の枝を伸ばす。それらの枝は瞬く間にイソギンジャガーの触手へと絡まり、力尽くでねじ切る。

優先するのは人質を捕らえる触手。ブチブチとちぎれてゆく触手、落下する人質。そんな彼らをひっかけるようにさらに枝を伸ばす。この時点で、シンリンカムイが展開できる枝の本数、その限界を超えていた。そのせいで一本、一本がか細く、弱いものとなってしまうが、それでも人一人をぶら下げるには十分である。

その間に、シンリンカムイはイソギンジャガーとの距離を詰める。

そして……

「はぁっ！」

渾身の一撃。自由にさせておいた右拳を、残った個性の力で樹木、硬質化させながら彼は右ストレートをイソギンジャガーの頭部めがけて振り降ろす。

鈍い音と共にイソギンジャガーはぐらりと体を揺らしながら、ゆっくりと地面に伏した。

その際、頭部からあふれる毒液が顔や腕に降り注いだが、シンリンカムイはそれでも、人々を守るように、枝を安全圏内まで伸ばしていた。

すべての人質をゆっくりと枝から降ろすと同時に、シンリンカムイは膝をつき、崩れる。

刹那、大きな歓声が上がった。

「さて……それでは、私は帰らせて頂きますね」

テレビ中継が終わると同時に、美代子は席を立つ。

が、それを阻止するのは黒霧だった。黒いもやが美代子の前に立ちはだかる。それを見て、蝙蝠男がガチガチと牙を鳴らすが、美代子はまるでペットをなだめるように頭を

なでる。
「そう簡単に帰せるわけがないでしょう?」
「まぁ、心配性ですのね。ですけど、私が帰ってこないとなると少し、面倒なことになりますよ?」
　美代子は振り向くことなく黒霧に答える。
「黒霧君。帰した方がいい。その女は信用も、信頼もないが、同時に自分が消えた時の保険もかけている女だ。多分、これはわしの予想だが、その女をこの場で殺すなんてことがあったら、ヒーローたちにこのアジトの事がばれる。それぐらいのことはするぞ、その女は」
　大使の忠告に、黒霧は無言であるが、もやを少し弱めたように見えた。
「私、あなたたちの事をヒーローに報告することはしませんわ。だって、今日は懐かしい友人と会ってみたいと思っただけですもの」
「それをはいそうですかと信じられるほど、俺たちは善人じゃないんだがな?」
　死柄木はばりばりと首筋をかいているが、美代子に攻撃をするそぶりはなかった。
「どちらにしても同じですよ。私が行方不明になったら、このアジトの事はバレます。ですが、今日は、今回だけは私は何も言いません。誰にも報告はしません」
「帰してやろう死柄木君。本当に、この女と関わるとろくなことがないぞ?」

「チッ……黒霧、その女を適当な場所に飛ばせ」
渋々納得したように、死柄木が指示を出すと、黒霧はもやで美代子と蝙蝠男を包み何処へとワープさせた。
「はぁぁぁぁ……ショッカーてのは、あんなのばかりなのか？」
わざとらしく、深い、大きなため息をつきながら死柄木は大使を睨んだ。
「あれは特別だよ。わしでもよくわからん。あの女はその昔、選ばれた人間をショッカーへといざなうのが役目だった。まぁ案内人だな。それが気が付けば裏切者となっている。まさかまだ生きてるとは思っていなかったがね……」
「なんで殺さなかった」
「手が出せなくてねぇ。ショッカーには敵が多いと話しただろう？　あの女はそのうちの一つに寝返ってね。それがまたショッカーと並ぶ組織力を持っていたせいで、何もできなかった。多分、その組織は今も形を変えて残っていると思うよ。だから、あの女の気まぐれのうちに帰しておいて正解なのさ。信用も信頼もできんが、あれで律儀なところもある。言わないと言えば、絶対に言わないさ。二度目はないがね」
「面倒臭ぇ……」
ばりばりと首筋をかきむしる死柄木。
だが、彼はそれをぴたりと止めると、別の質問を投げかけてくる。

「まぁあの女は今度会ったら殺すとして……本郷猛って、誰だ？」
その言葉は無機質ながらも、有無を言わさぬ迫力があった。
死柄木はまるで長年の親友と肩を組むようにして、大使に腕を伸ばす。わきわきと指をくねらせながら、大使の顔を覗き込むようにして聞いた。
嘘をついたら殺す、ぼかしても殺す、適当言ったら殺す。そのような意図は大使でも察せられる。
「あの改造人間の暴走も、あんたの、メッセージらしいが、その相手は誰だ？　本郷猛って男なのは話の流れでわかるんだが、そんな名前、聞いたこともねぇ。だが、こんだけのことをしてまで炙り出したい奴なんだろう？　教えろ」
「普通に聞けば教えるとも」
大使は気にせず、答えた。
「本郷猛。またの名を、仮面ライダー。ショッカー最大の敵にして……最高傑作の改造人間だった男だよ」
「仮面……ライダー？」
死柄木にはとんと聞き覚えのない単語だった。
「まぁ知らないのも無理はないさ。かつて、我がショッカーではとあるプロジェクトが進んでいた。改造人間とそれを強化するスーツ、システムの構築がね。まぁ色々とあっ

てとん挫したのだが、その唯一の成功例が本郷猛という男さ」
「で、裏切ったと？」
「察しがいいねぇ、死柄木君」
「大体流れでわかる。というか、裏切られすぎだろ、ショッカー」
「あはは！　本当だよ、これ以外にも結構な数の離反者が出てしまっているんだ。あはは！」
　何が面白いのか、大使はばんばんとテーブルを叩いて破顔する勢いで笑った。
「で、その本郷とかいうのがなぜ、気になる。最大の敵ってことは、お前らはそいつに滅ぼされたのか？」
「前にも言ったが、ショッカー及び組織が滅んだのは人間がいなくなったからだ。とはいえ、彼、本郷君によって齎された被害は大きかった。戦力のすべてを破壊され、幹部も殺された。ショッカー、ＧＯＤ機関、以降の組織も……すべて本郷君に、仮面ライダーによって潰されたよ。まさしく最強最大の敵さ。いやぁ参ってしまうな」
「ふーん……知らねぇな、名前も聞いたことがない。だが、先生が目を付けたショッカー、それを滅ぼしたってことは相当な奴なんだろうな。でも、俺は名前を知らねぇ、世間の連中だって知らねぇだろうな。いわゆる、隠しキャラってわけだ。それで、あんたはその男を、どうしたいんだ？」

「もちろん、会ってみたいのさ。そして聞いてみたい。この変わり果てた世界は、君が本当に守りたかった世界なのかとね。これはわしの心からの本音だよ。だって知りたいだろう？　人知れず、影ながら戦い続けている男の答えを。個性が溢れて、人間を超越したお前たちがはびこるこんな醜い世界が、君の求めた世界なのかと。わしは純粋に聞きたいのだよ」
「そいつは生きてるのか？」
「そう簡単に死んでくれたらわしらも楽だったさ。だがね、どーにも死なないんだよあの男は。何度も殺し損ねた。何度も立ち上がってきた。その繰り返しだった」
「叩いても、潰しても、立ちふさがる……か。反吐が出るな、影のヒーローってか？」
　死柄木は小さく肩を震わせた。
「なんだよ、俺も会ってみたくなったな。そして、潰したいな、そいつ」
「彼は強いよ。正直言おう、君じゃ勝てん」
「それでもだ。平和の象徴オールマイトはもちろん殺す。だが、あんたの話を聞いてその仮面ライダーにも興味がわいたな。そいつが、戦い続けて今の世界があるなら、そいつはあれだ、つまり……俺たちヴィランの生みの親みたいなもんじゃねぇか。それが、ヒーローやってるってか？　最高だな。最高の、皮肉だよ」
　死柄木は何かに満足したのか大使を解放する。

「ああ、楽しみだなぁ……早く俺たちも華々しくデビューしなくちゃなぁ？」

「あー……美代子さん、どこ行ってたんですか……」

目良善見は充血と隈で疲れ切った瞳を泳がせながら、デスクに戻ってきた美代子に恨み節を言い放った。

日頃の激務のせいか、覇気もなく、目良の言葉はかき消えるような小ささであったが、同時に執念に似たものも内在していて、はっきりと他人の耳に届く声であった。

「ごめんなさい。急用ができたので」

美代子はにこりと笑顔で返す。

向かい合って正面の席に座る美代子は紺色のスーツに着替えていた。それが彼女の、今の仕事着である。

楠美代子が所属する組織の名は、ヒーロー公安委員会。事実上、全世界のヒーローたちのトップであり、まとめ役である。美代子はその委員会の一人であった。

「急用って……いきなり消えるもんだから、仕事が僕の方に全部回ってきてるんですよ……仮免再補修の人数多すぎ、これに付け加えて来年度の仮免実習のスケジュールも仮決めしておかないといけないし、全国のヒーロー科の入学予定者数の計算もあるのに

……あとついでに、なんか、うえの方が騒いでましたよ、変なヴィランが出てきたせいで調査委員会も発足するとかで……」

「まぁ、大変」

パソコンを立ち上げ、デスクに積まれた書類の整理を始める美代子は目良の話には興味を示していなかった。

なぜなら全部知っているからだ。ヴィランの調査委員会とはつまり改造人間の事を調べるというわけだろう。彼らとて無能ではない。それがなんであるか、いつのものかを特定することぐらいは容易なはずである。

そして混乱する。歴史の闇に消えたはずの組織。ショッカーの存在に突き当たるのだから。

しかし美代子はそのことを、情報をヒーロー公安委員会で、話すつもりはない。

だが、一人だけ例外はある。美代子はデスクに備え付けられた電話を取り、短縮ボタンを押す。

数回のコールの後、通話が開始される。

「私です。美代子です。ええ、突然のお電話申し訳ありません。あなたにお伝えしたいことがあります」

「単刀直入に言いますね。ショッカーは復活しました」

微睡の夢

彼と出会ったのは遠い、気の遠くなるような昔だったはずだ。

世界が何度目かの混迷を極めた時代。個性というものがまだ超能力、超常として扱われていた時代。

個性あるものと無個性との間で当然引き起こされる争いは徐々に拡大し、ついには大規模な衝突となった。一歩間違えれば世界は荒廃する。滅びる危険だってあった。

だから自分が動いたのだ。混乱を収める簡単な方法はつまるところ、恐怖である。人々は言うだろう、それは独裁だ、独善だと。だからなんだというのだ。博愛を唱えるだけで世界に安寧が訪れるならとうの昔にこの世界は完全平和を確立している。なのにこうして争いが起きる。

とどのつまり、人類には恐怖という抑止力が必要なのだ。だから大国は核兵器を常備したし、常に戦力を揃えた。

かつて、世界を裏から支配していた組織の事は知っていた。我々のような個性に目覚めたものを、そうであると知られる前に、秘密裏に抹殺してきた組織。彼らもまた恐怖を力とした。

その存在を知った時、歓喜した。まるで、自分が求めたような悪の組織だった。そんな、素晴らしい組織が存在していたなんて、これはもう運命だと感じた。

次なる悪は、僕なのだと。

ならばこそ、個性の発現した新たなる時代において、恐怖という抑止力になりえるのはやはり個性だ。圧倒的な力を持った個性である。

目に見えて、そして人々にとって最も身近なものとなった個性。これほどまでにわかりやすいものはない。その中で、自分の覚醒した力はもはや天恵であったと言えるだろう。

個性を、奪い、与えるという力。至ってシンプルで、わかりやすい能力。

個性を求めるものには与えることで、不要であるものからは奪うことで、彼らの望みを叶えてきた。すると彼らは仲間になった。気が付けば自分は大きな組織力を得た。

そして、秩序を与えた。

間違いなく、自分は恐怖による統制と秩序を確立していた。

だが、愚かにもそれに反抗するものがいた。かつて、超常を狩るものたちがいたという噂は聞いていた。だが現れたのはなんとも弱い、そしていとおしい自分の弟であった。非力で、虚弱で、かつての自分ならなでるだけで潰してしまいそうな弟。

力もないのに、自分に立ち向かうその姿には憐憫すらあった。だから弟に力を与え

た。

それでも、弟は自分から離れていった。

そして、あの男が現れた。

鋼のような男だった。それは肉体の比喩表現ではない。いうなれば、男の存在そのものだろうか。

カスタマイズされたバイクに乗り、仮面をつけた男。赤いマフラーを身に着けた男。暗い、深い緑のグローブとスーツを身に纏い、風車を携えたベルトを持った男。

裏社会を支配し、悪の帝王として君臨する自分の前に、男はたった一人で現れた。幾人もいた部下たちはなすすべもなく男の前に倒れていった。いかなる個性を使ったのか、いやそもそも個性があったのか、男は徒手空拳だった。拳と足、肉体のみで個性を扱う猛者を、まるでいともたやすく撃退した。

高速移動を可能とし、音速すらも突破する部下の一撃を男はただ上半身をそらすだけで交わし、逆に放り投げた。ダイアモンドよりも固い表皮を持つ部下の肉体はただの一撃、狙いをすました針のような一撃で貫通された。八本の腕を持ち、それぞれに武器を持った異形の部下が繰り出す縦横無尽の攻撃は一度も男を捕らえることなく、武器のすべてを瞬く間に破壊された。

毒液、光線、溶解液、飛行能力、電撃、いかなる個性を前にしても男はただ一つの肉

体のみでそれを制圧した。
彼の事は知っていた。裏社会の帝王、悪の王として名をはせるようになればいやでも耳に入る。事実、いくつもこちらの計画を潰された。
だが彼は常にこちらの邪魔してきた。的確に、完璧に、完膚なきまで組織は蝕まれていった。
あの時、うぬぼれがあったことは否定できない。たかが一人の男に何ができると、かつて存在した闇の組織のように壊滅するわけがないと高をくくっていたのも事実だった。
気が付けば、かつての部下たちは全滅した。そして表の世界ではヒーローたちがのさばった。
そこには弟の姿もあった。
そう、あの男の名は確か……仮面ライダー……。
そして、僕は……〈彼〉と対面した。
だから、僕は……悪になると決めたのだ。

「先生、聞いとるかね？」

大使の声で、ＡＦＯははっと意識を取り戻した。
「眠っていたのかね？　珍しいもんだな」
「僕だって、眠たい時は眠るさ。それに、色々とやることも多くてね」
「そうかね。それで、あんたの依頼だけどね、とにかくかき集めるだけ集めてきたよ」
「ありがとう、大使。しかし、見事なものだね。どうやって、一介の中学校教師が資金をかき集めれるんだい？」
その空間は暗黒だった。
周囲を動力パイプで埋め尽くし、まるで巨大生物の内部のような場所。詳細は不明、しかしてここがＡＦＯの住処であることを大使は知っている。
そんな彼でもここが具体的に日本のどこなのかはわからない。東京のどこかなのは間違いないだろうが、ここに来るときは大体、ＡＦＯの何等かの個性によって転移させられている。
そう、大使の目の前にはＡＦＯがいた。巨大な生命維持装置と人工呼吸器に繋がれた半死半生の男。顔が潰れ、口元だけがかろうじて残った醜悪な姿が闇の中でぼうっと映り込むように、鎮座していた。
見る者がみれば、それは玉座やご神体のように見えるかもしれないが、大使は磔にされた罪人というイメージが先行した。

「まぁあれだな。昔取った杵柄という奴だ。金を後生大事に抱えている連中というのは痛いところが多い。昔なら、簡単にしっぽを掴んで搾り取ってやれたのだが、いやはや恥ずかしい。あの無能のカメレオンの奴が情報収集に手間取るせいで、これっぽっちだ。これじゃ政治家も動かせんよ」

大使はアタッシュケースに積まれた現金をＡＦＯへと見せる。札端、優に数千万はくだらない金額だろう。

それは大使が、敵連合に合流してからかき集めた資金である。一軒家であればローンを満額返済できる、もっと言えば都心の高級マンションで贅沢できる規模の資金であったが、大使は申し訳なさそうな表情を浮かべるだけだった。

大使は、かつて表の顔として政治家の秘書をしていた。その政治資金を用意することに才能を発揮し、政治家たちを操ってきた男である。

もちろん、それはかつての組織のバックアップあってのことでもあったが、政治の中枢にいて、政治家を……時の総理大臣すらも操れるのは大使の持つ才能がさせたことである。

そこに金というものを詰め込めば、人間というのはあっさりということを聞く。

だが、やはり組織の壊滅は大きい。かつては国家予算規模の金を自在に操れた男も今ではマンション一つを買うだけの資金しか集められない。それに、良くも悪く今の世情

は悪党が動き辛い世の中だ。
いたるところにヒーローがいて、個性を使う人間がいる。下手に動きすぎれば目を点けられてしまう。
なので、脅すというやり方はあまり取れない。煽て、気をよくさせ、掠め取る。大使に大金をはたいた者たちはまるで慈善事業をしたような気分でいることだろう。
「それに、あんたらの活動資金としても雀の涙だろう。なんと言ったか、あんたらの作ってるあれ、ドクターの研究の足しにはなるだろうが」
「脳無だね。大使、君が提供してくれたショッカーの改造技術に、ドクターも喜んでいたよ」
「そうかねぇ……純粋な、戦力を生み出すという改造に関してはあんたの方が上だろう？　第一、手に入ったショッカーのデータはその殆どが初期型のものだ。古臭い、時代遅れの技術だよ」
「彼はそうは見ていない。確かに、大使の言う通り、今回手に入った最初期の改造技術は今更なものばかりだった。だが、温故知新という言葉がある。君たちは、戦闘能力を向上させるために改造人間を作っていたわけじゃない。そうだろう？」
「よくご存じで」
ＡＦＯはなんでもお見通しだなと大使は素直に関心した。

　果たして、彼はどこまでショッカーの事を、組織の情報を知っているのだろうか。裏社会の人間である以上、かならずどこかで組織との接触はあるはずなのだが、そのころの大使はすでに閑職に近い扱いを受けていた。そして気が付けば組織が滅んでいたというわけである。

　それに、この男は仮面ライダーの事を知っている。

「そういえば、あんたはわしに仮面ライダー、本郷君の事を教えてくれると言っていたが、わしを誘って以降、その話がないのはどうなんだね。契約違反じゃないのか？」

「ん？　あぁ、そのことか。済まない、忘れていたわけじゃないんだ。ただ、僕としても優先するべきは死柄木の成長であり、敵連合の土台を盤石にすることなんだ。ドクターもその為に動いているしね。あぁ、話が逸れたね。仮面ライダーの事だが……実は彼、五年前に一度、日本に戻ってきているよ」

　ＡＦＯの言葉に大使は「そんなことは知っとる」と落胆気味に答えた。

「かつてほどじゃないが、わしにも情報を仕入れるつてぐらいはある。それぐらいの情報は知っとる。あんた、オールマイトにもそうだが、仮面ライダーにもこっぴどくやられているじゃないか。君の部下の……あの大きい奴だよ、彼も死にかけたのだろう？」

「ギガントマキア……正直、驚いた。彼を、一撃で倒す男がいたなんて、最初に聞いた時は僕は信じられなかったよ。彼の治療に結構な資金を必要とした。ドクターも怒って

いたなぁ」
「ふん、彼は無敵だよ。パワーだけで勝てるとは思わんことだ。まぁ、なんにせよ、あんたの出鼻をくじいたところで、本郷君はまた日本から姿を消した」
「僕が確認できる範囲で、彼の足跡をたどってみたところ、最初は欧州にいたらしい。そこから中東に移動しているね。海外にも友人はたくさんいるのだが……あはは！　全員と連絡が取れなくなってしまったんだよ！　あっはっは！」
　ＡＦＯはひどく愉快に笑い声をあげた。
　彼が笑うたびに、生命維持装置が異音を出しているのを見れば、面白くて笑っているわけじゃないのはすぐにわかる。何かしらの個性が影響を与えて、それに対して警報が鳴っているのだ。
「そして僕はオールマイトに倒されこのざまだ。なんだって彼はわざわざ五年前に僕たちの前に立ちふさがったのやら……それまではずっと君たちの遺産の処理していたようだけど」
「なるほど、だから日本にいなかったというわけか……それにしても残党……ねぇ？　大方、組織の技術をネコババしたテロリスト崩れだろう」
「その中には僕の友人たちもいたのだがね。はてさて、仮面ライダーも働き者だ。どこで聞きつけたか、的確に友人たちを潰して回った。ご丁寧に、組織の技術もすべて破壊

してね。この、生命維持装置も手に入れるのに相当の被害が出た。正直、海外での活動は控えたい気分だよ。立て直すのにも時間がかかる。まぁ、その分、この日本での組織作りには専念できた。それこそ、地べたをはいずりまわって、情けなく、恥ずかしげもなく」

「その努力は認めるよ。だが、なんというか、因果だな。どうにもわしら悪党というのは必ずブチのめされる決まりがある」

「そうだね」

ＡＦＯは否定も何もせず頷いた。

「だからと言って、やらない理由にはならないだろう？　常に未来を見続けなければね」

「そこには同意するよ。ま、わしらの最終的なゴールは正反対ではあるが……」

「超常能力の否定か。それこそもう果たされることのない目的ではあるのだけど……仮に、一つだけ、君たちの理念を成功させるカギがあると言ったら、どうする？」

ＡＦＯの問い掛けに大使は一瞬、能面のような顔つきをした。

「下らんね」

大使はたばこを取り出し、火をつける。

その瞬間、ＡＦＯの周りに独自の気流が発生する。たばこの煙は何処へと流れてゆき、ＡＦＯのもとには届かない。

「ここは一応、禁煙なのだがね」
「それはすまないね」
そう言っても、大使はたばこを消すことはなかった。
一息だけ吸って、大使は答える。
「個性を制御する、個性を抹消させると言いたいのだろう？」
「あぁ。まだ未確定の情報だけど」
「その程度の考え、わしらがやってこなかったとでも思うかね？　とうの昔に、何度も実行したさ。だが、種の進化の速度はすさまじい。仮にこの世界のすべてを無個性に戻すなんてことは、どう計算しても不可能だ。一時的な抹消が、何になる？　いや仮に今生きるすべてを無個性にできても、また世代を重ねれば抗体を持った個体が生まれるだけだ。まぁ、社会の混乱を引き起こすという点では武器になりえるだろうが……それだけだ。ヒーローも馬鹿じゃない。対策ぐらいはしてくる」
一息に語った大使はもう一度、たばこを口にくわえ、一気に吸い出す。
大量の煙を吐きながら、大使はため息交じりに言い放った。
「あんたが、何を求めてるのかは知らん。かといって、わしはあんたのやろうとすることを否定はせんよ。何かやりたいことがあるなら協力はする。今のわしは、一応、あんたらの傘下だからね。言いたいことは言わせてもらうが？」

「ご意見番というのは重要だよ。弔も、まだまだ直情的なところがあるからね。とはいえ、そろそろ僕たち……いや弔たちも表舞台に出なければいけない時期に来た。今年……オールマイトが再び舞台に立つ」
「雄英の教師になるのだろう？」
　それは世間ではまだ公表すらしていない情報であった。
「そう。そこでヒーローの卵たちを育成するらしい。だから、それをね、潰してあげようと思うんだ。楽しそうだろう？」
　ＡＦＯは興奮を隠しきれていない様子で、笑い声をあげる。
「一応、そこにはわしの教え子も含まれそうなのだがね」
「おや、そうなのかい？　まだ入試は先だろう？」
「合格するよ、少なくとも一人はね。あともう一人いるが……まこっちは運が良ければだな」
　大使の脳裏には二人の生徒の顔が浮かんだが、それは些細な事だ。
　ＡＦＯに教える必要もないだろう。
　その内の一人、緑谷出久が夜な夜な、不法投棄の海岸で何やら訓練をしているのを知ってはいるが、それこそどうでもいい話だ。彼を鍛えている男の事も。
　特別、教えるほどの事じゃない。この思考も、ＡＦＯの何かの個性で読み取られてい

る可能性もあるが、それならそれだ。
「計画の具体的な内容は新入生たちが入ってからになるのだけどね」
「ずいぶんな弾丸スケジュールだな。それで、そのお披露目の日に、わしも出向いた方がいいかね？　幹部としては祝いの席にはいた方がいいだろう？」
「君の言う教え子と対面することになるかもだけど、良心が痛むかい？」
「いいや？」
大使はきっぱりと答えた。何を当たり前のことをとでも言いたげにすっとぼけた表情である。
美代子と再会したときからだろうか、いやこの敵連合に参加した時からだろうか。
大使にとって、隠れ蓑であった教師という立場はもはやどうでも良いものとなっていた。
「実はね、今日、退職届を出してきた」
「この時期にかい？」
ＡＦＯとしてもこれは意外だった。
「即断即決だよ、何事もね。それに、教師というのは、まぁ、悪くはなかったが、政治より金にならん。それに、部活動の顧問などというものを任される身にもなってほしいね。形ばかりの顧問でも、いなければならないのは本当に、過去からの悪い風習だ」

「それは、それは。ご愁傷様だったね。ということは今後は敵連合として集中的に動いてくれるということでいいのかな？」
「まぁそうなるな。と言っても、今は堪え時だな。ショッカーの改造人間でかく乱はできているだろうが、それでも監視の目が厳しくなってはいる」
「その通り。悪の組織は派手に、しかしてひそやかに。これが基本だね」
　ＡＦＯはのどを鳴らすように笑う。
「さぁ始まるよ、僕の夢が。僕の戦いが。僕の憧れが」